# 明治八・九年の「奈良博覧会」陳列目録について（上）

高橋隆博

## 一、はじめに

わが国の博覧会は、明治四年十月十日から十一月十一日までの一カ月間にわたって、本派本願寺を会場として開かれた京都博覧会が最初である。これは、京都の有力商人達が、東京遷都によって首都としての地位を失い、衰退する一方の京都の景況を回復すると同時に、一般人の啓蒙をうながすために企画した博覧会であった。しかし、その実状は、古器旧物が主たる陳列品を占めるという、さながら大々的な骨董会に近い内容であった。こうした古物中心の博覧会への反省から、勧業殖産的性格を前面に押し出す展観の必要性の機運が次第に高まり、早速、京都市と民間との間で合同協力して商工奨励を主眼とする博覧会を開く計画が練られて、その母体となるべき京都博覧会社を設立する。そして、翌明治五年三月、本願寺・建仁寺・知恩院等を会場として京都博覧会が開かれ、これ以後、毎年恒例のごとく開かれるのである。この博覧会が、当時芸術に関わる人々の唯一の作品発表の場となったこと、一般の人々の文化財に対する理解と認識とを著しく高揚させたこと、そして、京都および京都周辺地域の諸産業の発達を大いにうながした功績は計り知れなく大きく、その役割は高く評価されねばならない。

一方、明治政府内においては、幕末にパリ万国博覧会に徳川幕府が正式に参加したり、肥前・薩摩藩が加わったことの経験と実績とを踏まえて、すでに博覧会の機能や性格、そしてその影響については十分に認識していたようで、博覧会をいちはやく殖産興業政策の一環として位置づけている。かかる認識のもとに、明治四年五月、大学南校物産局主催の博覧会を計画するが、その実際は、膨大なプランとはうらはらに、ごく小規模の、名称も物産会と改称して、わずか一週間だけ開いたにすぎなかった。

この間、旧物旧習を否定する風潮や廃仏毀釈の動きは、数多くの文化財遺産を破壊散逸させた。こうした状況を憂慮した太政官は、明治四年五月、「古器旧物保存方」を布告し、漸く文化財の保護と調査とに乗り出す。加えて、明治六年に開催予定のウィーン万国博覧会への参加をとりきめ、それへ文化財を出品することを決定するなどの機運と相俟って、文化財への関心も次第に高まりをみせはじめる。こうしたなかで、文部省博物館は明治五年三月、湯島の聖堂において博覧会を開催し、これを大盛況のうちにおさめたのである。

ところで、京都や東京の博覧会のほかに、実は奈良においてもそれらと前後して博覧会が開かれているのだが、こちらのほうは意外と知られていない。奈良のそれは、明治八年の三月一日から同年五月二十日までの八十日間にわたって、東大寺の大仏殿内及び東西両回廊を会場として開いた、奈良博覧会社主催による第一次奈良博覧会である。

京都や東京のそれについては、すでに『京都博覧会沿革誌』、『京都博覧協会五十年記要』、「京都の博覧会」[註①]、『東京博物館百年史』などのまとまったものや研究業績があり、明らかにされている。ところが、奈良博覧会のこととなると、「かつて開かれたことがある」という程度に、わずかの先学[註②]が触れ来った以外は、これまでほとんど注目されることなく、むしろ不問に付されてきたといってよい。奈良博覧会がどのような事情で成立し、開催されるにいたったのか、その規模と運営の実態はどうであったのか、そして、一体どのような物が展観されたのか、そうした具体的なこととなると何一つ明らかにされていないのである。

ところが近年、明治八年の第一次奈良博覧会と、明治九年の第二次奈良博覧会の両展観目録を閲覧する機会を得た。そこには、夥しい数の正倉院宝物をはじめとし、東大寺・法隆寺・春日大社などの南都・大和の諸社寺の宝物類、旧家・好事家の所蔵品にいたるまでの、実に膨大な数の美術工芸品が列挙されているのである。明治の初年に、設備も管理体制も不備のはずなのに、しかも八十日間という極めて長い期間にわたって、第一級の文化財を陳列するなど、今日では到底許されない無謀極まりない話ではあるが、まさに画期的な出来事で、当時の人々の耳目を大いに一新せしめたことであろう。それはともかくとして、この両目録は、奈良博覧会の内容と性格とを明確にすることのできる唯一の資料である。また、明治初年における奈良県下に所在する文化財の大要としての性格も有している。

この目録に記載される膨大な数の美術工芸品の全部が今日に伝存するというのはもとより無理で、すでに焼失・紛失・毀損等で失われているものが相当数あり、その後の所有先を変更したり、所在不明になっているものもあり、一つ一つの追跡調査は相当困難である。逆に、現在、国宝や重要文化財の指定を受けているものや、各種美術館・博物館の所蔵とな

っているものもかなりの数にのぼる。そして何よりも、展観されたなかで、今日に伝存し、しかも伝来やかつての所有の不明なものは、この目録が明確に証明してくれるのである。

こうした意味から、本目録は単なる奈良博覧会の陳列目録の位置にとどまらず、美術史研究に寄与するところ極めて大きいものがあると考えられる。ところが、これまで本両目録の存在については一部の間で知られていたものの、顧みられることもなく、もとより公表されたこともない。今度、幸いにも所蔵先の御高配を賜ったので紹介させていただくこととした。

## 二、奈良博覧会開催の事情

両目録に説明を加える前に、私のこれまでの調査で知り得た、奈良博覧会の成立の事情と経過とについて若干触れておきたい。

かつて、私の勤務する奈良県立美術館で、特別展「大和の漆芸」を企画する機会を得た。その際、明治期における奈良漆器の発達と、漆工家の動向を探っているなかで、その背景に奈良博覧会社及び奈良博覧会が大きな役割を演じていることを知るにいたった。さらにいくつかの興味深い資料に接したので、そのことを以前メモ程度に紹介したことがある。[註③]その後、多くの方々から貴重な御教示と御協力とを寄せていただき、少しずつではあるが、次第にその全体像を把握しつつある。小稿ではそのことについて記すことを目的としていないので、以下簡単に触れておこう。なお、奈良博覧会の記録的概観を試みたものを別稿で用意しているので、いずれ発表したいと考えている。

さて、明治四年、奈良県庁舎が奈良町に開かれるや、漸く町勢も活況のきざしをみせ、落着きをとりもどしはじめる。時の奈良権県令藤井千尋は、奈良において博覧会を開催することを考え、これを奈良の有力町民に披瀝し、計画することを勧めた。これを受けた植村久道・鳥居武平らを中心とした有力町民らは、早速その母体となるべき株式会社奈良博覧会社を設立し、東大寺の龍松院に本社を設置し、資本金を五〇〇〇円と定めた。明治七年のことである。同年十月には入社数が七〇名に及んだ。次いで、会社の組織、博覧会運営の諸規則・細則をとりまとめて、いよいよ開催の基礎をかためたのである。[註④]

当時の奈良は、社寺を中心とした町であったので、これといった主要な産業は未発達の状態であり、明治維新体制という社会変革をむかえて、今後どのように経済的高揚をはかり、いかにして町民の自覚をうながしていくかが官民の共通した課題であり、そのことがとりもなおさず近代化への道程であった。すでに博覧会政策の成果やその及ぼす計り知れない影響については、奈良に先立って開かれ、盛況をおさめた京都博覧会を通して深く認識していたと思われる。つまり、奈良

のそれは、京都の博覧会に啓発された結果とみてよいかもしれない。

奈良博覧会は、殖産勧業の必要性から提唱された官民一致した施策であった。その間の事情は、次に掲げる資料[註5]が雄弁に語ってくれる。

当社(奈良博覧会社)組織ノ儀ハ　茲ノ奈良ノ地タルヤ三方ニ山ヲ帯ヒ物貨運輸ノ不便ヲ極メ自然商工共ニ振起セス　自他交通ノ狭キヨリ見聞博カラス　比隣腹背ノ地ト雖モ彼我ノ物産時下ノ価額等ヲ詳ニセス　需要供給有無交換ノ如何ヲ顧ルニ由ナク　偶有志アリテ之ヲ講スルモ概ネ無資産ニシテ其志ヲ果サス財産ヲ有スル者ハ自ラ安ンシテ土地ノ為ニ本分ヲ尽スノ活発心ニ乏シ　夫レ当地ハ大和全国ノ都会ニシテ斯ノ如シ　実ニ忍ヒサルノ至リナリ爰ニ幸ヒ当国ハ古器物ニ富タル他国ノ及ハサル処ニ付　之ヲ基トシ大小博覧会ヲ開設シ土地ノ潤沢ヲ量リ　知識ノ開進ヲ促シ商工奨励作興スルニ如スト

ここには奈良博覧会の開催にいたる経過、奈良の置かれている地理的立地条件、県民性、そして何よりも近代奈良への展望が語られ、興味深い内容を示してくれる。特に注視してよいのは、奈良は他の府県に比べて圧倒的に社寺・古器旧物の豊富な土地柄であるという自覚であり、その特性を商工業に反映させ、経済的高揚を促進させようとしたことである。従って、その起爆剤的役割を奈良博覧会に課したととらえることができよう。

それでは、奈良博覧会の開催は、京都博覧会の影響は考えられるものの、単にそれだけの理由で、また地元の一部有力者達だけの着想によるものだったのだろうか。そこで、いま一つ、開催にいたらしめた原動力として、どうしても触れておかねばならないことがある。それは、町田久成と蜷川式胤の、この両者の影響と役割である。両者は、ここで詳細に触れるまでもなく、明治政府内にあって、文化遺産の重要性をいち早く唱え、その保護と調査を主導した第一人者で、いわば今日の文化財保護行政の生みの親といってよい。

明治五年、文部省は文部大丞町田久成、文部六等出仕内田正雄、外務大録・文部省出仕蜷川式胤等をして古社寺の宝物調査を実施せしめている。この調査の目的は、基本的には文化財保護の立場から行なわれたのであるが、具体的には常設の大博物館建設準備の一環としてであり、さらには翌明治六年に開かれるウィーン万国博覧会への出品準備のためでもあった。調査の範囲は中部・近畿の各県にわたって、実に四カ月に及ぶ長期調査となった。調査の白眉は何といっても正倉院御物調査であろう。このため宮内省では、宮内少丞世古延世を勅使として派遣している。

まず、八月十日、町田・世古らは、奈良県令四條隆平・東大寺側と綿密に打ち合せを行ない、十二日に御封開緘となった。これはまた、近代に入ってはじめての開封となる。調査

の実情は、蜷川式胤の調査日記である「奈良の筋道」[註⑥]に克明に詳述されているのでつぶさに知ることができる。詳細はそれに譲るとして、この調査には、東大寺信徒の役員はいうまでもなく奈良県庁や有力者・知識人が何らかの形で深く関ったとみてよい。ちなみに奈良県庁からは稲生真履が御用掛として出仕している。[註⑦] また、この調査では宝物の模写を行なっているが、その際、地元の者で絵画や伝統的工芸に関る職人たちが動員されたとみてよいかもしれない。

ともかく、奈良における正倉院宝物調査や社寺の宝物調査の、奈良の人々に与えた影響は多大であったと推察されよう。正倉院の開封期間は、明治五年八月十二日から同月二十三日までの十二日間であったが、その準備期間を含めて、さらに大和の社寺宝物調査の日程を加算すれば、かなりの長期間、町田・蜷川らは奈良に滞在したことになる。その間、彼等は連日のごとく地元の人々と密接な交流を持ったことはいうまでもない。その際、彼等は正倉院の調査状況や御物の一つ一つについてのいかに素晴らしく勝れた物であるかを、そして、大和の社寺に伝存する宝物類の価値の高さを説いたことであろうし、明治四年・五年の物産会や湯島聖堂大成殿での博覧会の盛況振り、あるいはウィーン万国博覧会への出品物の構想、さらには政府は奈良の地に博物館を建設する展望を持っていることなどを熱っぽく語ったことと思われる。地元としても、すでに文化財の重要性は認識していたものの、明治政府部内にあって、その方面の第一人者である彼等の口から直接説かれて、改めて見直したことであろう。そして、地元としては、今後文化財にどのように対応していくべきか、近代化の過程でそれをどう位置付けていくべきか、そうした細部にわたってかなり突込んだ論議を提出し、その解答を求めたことであろう。ともかく、町田・蜷川らの来寧が奈良博覧会開催の導火線になったことは疑いのないところである。次に掲げる資料がそうした事情と経過を証明してくれる。これは、以前『奈良国立博物館小史』に引用掲載された蜷川式胤の日記の一部である。

九月九日(明治七年)(中略)県令藤井(奈良)面会ニテ用弁ノ談シ仕ル也　尚大橋[註⑧]ニモ申置事　当地大仏殿ニ於博覧会催ス見込段々申込候所藤井氏大悦ノ由ニテ　手続聞カレ　外県ヨリ申願相済候儀咄シ出ル　然ルニ何月比ニ見込県ヨリ申立ノ義相談アリ凡十一月末ニ宜敷ト余申且局ニ於テモ私ニ尽力被頼申候

右の資料によれば、明治七年九月九日、蜷川式胤は奈良権県令藤井千尋と面談した。その席上、蜷川は奈良での博覧会開催をうながしたところ、藤井は開催への積極的姿勢をみせ、もとより異存のないところである、ついてはどのような手続きを踏むべきかと、具体的な相談に入ったという。これ以前、蜷川は大橋長意にその構想を持ちかけ、すでに同意を得ていた。つまり、奈良博覧会は、蜷川式胤の発案と構想とにより

成立し、これを奈良県が受けて開催にいたったのであると明確に指摘できる。

それでは、なぜ蜷川はこのような構想を描き、持ちかけたのであろうか。そこには、おそらく次のような意識があったのであろう。それは一言でいえば、大和における社寺の宝物類及び個人所蔵にかかる文化財のさらに仔細な調査である。すでに社寺の宝物調査に手を染めてはいたものの、大和に所在する文化財は質量ともに他府県に勝っており、しかも県内といってもかなりの広範囲にわたって所在しており、僅かの調査員と日数とでは到底おぼつかない現状にあったと思われる。そこで、文化財を一堂に集める方策として採用したのが奈良博覧会であったと推測される。もちろん、その背景には、奈良の地に博物館を建設し、そこへ陳列する基礎準備の意味をも含んでいたと思われる。一方、地元の奈良としては、殖産勧業政策を展開するには、博覧会はかなり有効な方法であるという認識があった。こうした双方の利益と思惑とが見事に合致して、奈良博覧会が生み出されたと解して大過ないであろう。

こうして成立した第一次奈良博覧会開催の前年の明治七年十一月、稲生真履に奈良博覧会社の植村久道ほか二名が随行し上京した。正倉院宝物の開封・展観の請願のためである。請願を受けた宮内省は、太政官に指示を仰ぎ、太政官は町田久成に意見を求めた。町田は、「千載ノ古器無二ノ珍宝ニ付前世ノ盛事考証致ス可キ物」であり、曝涼の意味からも公開を許可することは望ましいと答申し、[註⑨] 明治八年二月九日これが許可されたのである。この時、もし町田が公開に反対の意見を答申しておれば、正倉院宝物のはじめての公開展観は実現しなかったばかりか、奈良博覧会そのものの性格と方向とをおそらく別にしたことであろうと想像される。町田は、この件についてすでに明治五年の時点で承知していたことであろう。

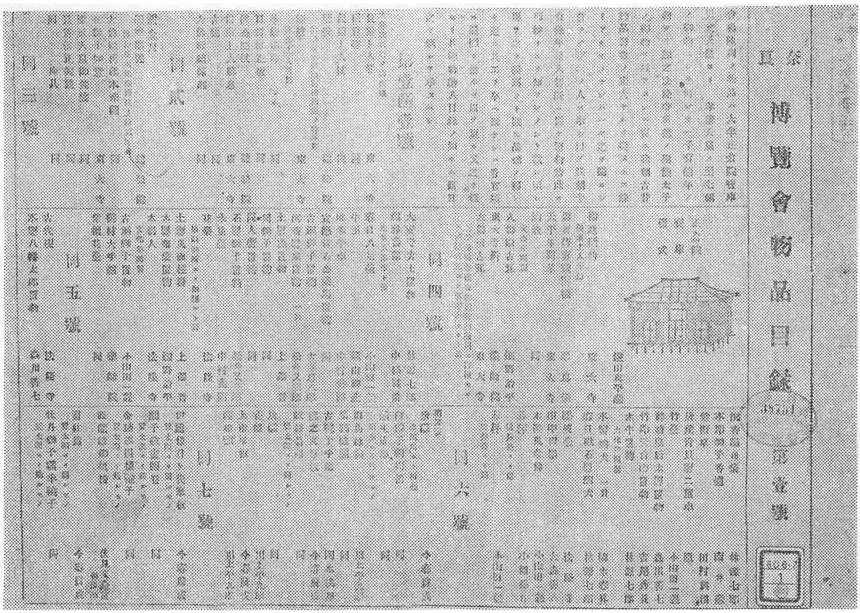
このように、奈良博覧会の開催にいたった背景には、明治五年の正倉院宝物・大和社寺宝物調査、とりわけ町田久成・蜷川式胤の存在を無視して語るわけにはいかないのである。

## 三、展観の目録

### 明治八年度の目録

この目録は、第一次奈良博覧会の陳列目録で、奈良県立奈良図書館の架蔵にかかる。構成は、「奈良博覧会物品目録」第一号〜第十四号、「会場第三区大仏殿内正倉院宝庫御物陳列目録」第一号〜第七号、以上の都合二一枚からなる。大きさは縦三〇・〇センチ、横四一・〇センチの美濃判木版刷で、随所に指図があり、それぞれの右肩上部に「文部省官許明治八年五月三十一日」の朱印がおされている。なお、印刷は各紙とも左下欄外に「西京煥文堂印行」とある。

このうち、「大仏殿内正倉院宝庫御物陳列目録」（第一号〜


奈良博覧會物品目録

明治８年奈良博覧会物品目録第壱号（奈良県立奈良図書館架蔵）変色のため不鮮明である。

第七号）は、昭和四年に『東洋美術』特輯「正倉院の研究」の別冊附録として、原寸原紙で三〇〇部が複製されたことがあるので、その内容は周知のことになっている。また、「奈良博覧会物品目録」のうち、第三号の一枚のみも、かつて写真図版で紹介されたことがある。[註⑩]

本目録は、奈良博覧会に展観された全部の目録ではない。「奈良博覧会物品目録」第十四号の末尾に、「是レ東西廻廊陳列不売品ノ概略ナリ　其売品ノ若キハ是ヨリ以下三十号ニ至ル迄各国各地ノ古今ノ天産人造物参差トシテ充溢セリ」とあるように、不売品の美術工芸品以外に、博覧会本来の機能を果たすべく、売品である諸工商業製品・産物を一堂に陳列している。

目録によれば、会場を四区に分け、さらにそれぞれを出陳物の種類に応じて陳列するために号単位で細区分している。大仏殿内を会場第三区とし、そこを限って正倉院宝物を展観したことがわかる。東西の両回廊にその他の美術工芸品を陳列したことはわかるが、どのように区域を分割したのか、またどんな方法で陳列したのか、いかなる設備を施したのか、こうしたことについては今のところ詳細ではない。ただ、正倉院宝物については、少し後の資料だが次のような記録のあることを付記しておこう。[註⑪]

盧舎那仏ノ御膝下ニ白木ノ高机ヲ列ヘ大巾ノ白金巾ニテ覆シ其上ニ置カレタリ其白金布ハ大巾三十六反ヲ要ス納

品者ハ主事鳥居武平ノ親類奈良光明院町白井和助ナリ

ところで、目録中の指図だが、これはかなり正確な図である。しかも、そのほとんどに法量を記載している。つまり、この指図は、直接に現物を見ながらつくったか、かなり精細に描かれた模写絵に基づいて製作されたかのいずれかと考えられる。指図の美術品の所在地は距離的に相当のばらつきがあり、短期間ではとても困難であるから、私は後者を考えている。そこで思い起こされるのは、明治五年の正倉院宝物・大和社寺宝物調査である。この調査に際し、町田・蜷川らは古器旧物の模写作製のために自費で柏木政矩を随行している。つまり、私は柏木の模写絵と指図とは不可分の関係にあったと解したい。

また、目録に記載される夥しい数の出陳物は、明治五年の調査リストに基づくものと考えられるし、調査の時点で出陳の勧誘が行なわれていたと推測される。出陳物についての詳細な事項、たとえば銘文・法量・伝来などの記載はいささかそのことを証明してくれる。すなわち、こうした記載は克明な調査報告をもとにするか、事前における周到な準備がなければ果たされないことである。もしこうした推測が妥当であれば、蜷川らはすでにその段階で奈良博覧会の構想を描いていたことになる。因みに、蜷川はこの博覧会に、「古盃　銅板図　鳥卵腐敗ヲ試ル目鏡　米国ナイヤガラ瀑布油画　久松学校写真　万国地図　晴雨機　英国古代花器模　伊太利亜モザイク　陶器玉石　仏蘭西人印　ブラチヤノトバス　硝子ニ文字ヲ記スル筆(仏蘭西製)　英国服飾　正倉院写真　海面測量図　佐土原班竹　ホルネヲ国矢　円形写真　キブス人写真　石象眼　ビルマルク石版　矢根　魯西亜帝額　印版機械　紙煙草製機械　白壇惣彫番箱」等、西欧の文物を中心にした都合二七点を出陳している。これらの品々を蜷川自身奈良で求めたとは考えられず、出品するためにわざわざ東京から運んで来た物ばかりであろう。こうした事実からも、蜷川の奈良博覧会にかけた意気込みと役割を高く評価しなければならない。

ところで、人々の耳目を驚かした第一次奈良博覧会の入場者数は、延べ日数八〇日間に、実に一七万二〇一〇人を呼び込んで大盛況をおさめた。このため、奈良博覧会社は翌年も引き続いて開催することを決定した。また、明治八年九月には、大仏殿内を会場とする「常備博覧小会」を開いて、社寺及び個人所蔵の美術工芸品を陳列している。なお、同年十月には、奈良博覧会社の初代社長に植村久道を、幹事に鳥居武平以下五名、副幹事に十四名を選出し組織を整え、奈良県庁において辞令を交付している。

**明治九年度の目録**

この目録は、「明治九年奈良博覧会物品目録」第一号〜第十五号と、「明治九年奈良博覧会大仏殿内正倉院御物陳列目

録」第一号〜第四号の都合十九枚からなる。前年度の目録に比して一回り小さく、縦二四・五センチ、横三四・七センチの美濃判木版刷の図入目録である。印刷所は不明。ここで紹介するのは東大寺図書館の所蔵にかかる目録である。なお、指図の版木も同館に残されている。目録中、「奈良博覧会大仏殿内正倉院御物陳列目録」第一号のみは、かつて写真図版で紹介されたことがある。[註⑰]

明治九年の第二次奈良博覧会は、三月十五日から同年六月二十五日までの一〇〇日間にわたって、やはり東大寺を会場として開催され、前年よりは少ないがそれでも九万三〇〇九人の観客を動員した。前年に大盛況をみたことで、奈良博覧会社と奈良県庁は、開会するに先立って、兵庫県・和歌山県・奈良県等の諸社寺に係官を派遣して、古器物・古書画などを調査せしめ、あるものはこれを収集し、あるものは出陳の勧誘を行なわせている。規模の拡大をはかったのである。高野山の金剛峯寺をはじめとし成慶院・龍光院・蓮華三昧院・増福院・成福院・金剛三昧院・清浄心院・蓮華定院・金光院・増長院・釈迦文院等の各諸院、京都宇治の興正寺や京都博覧会社からの出品がみられるのは、そうした働きかけの結果である。そして、前年度に比べて個人の出品者がかなり増加している。ただ、前会の出陳物とかなりの数が重複している現象がみられる。重複のうちには、前会の終了後もそのまま会場にとどまり、奈良博覧会社の預り品となり、大仏殿内の「常備博覧小会」に陳列された物も相当数含まれると考えられる。

蜷川式胤は、この第二次奈良博覧会にも、「ペン画　銅印画　海面測量図　フードルロノ画　独乙国飾文字　油画（相州江ノ島ノ景）　写生ノ器械　印盤ノ機械（和蘭国ノ製）　独乙国麻布切見本　矢根（美濃守政常作）　普国戦賞人写真　独乙国太子ウイルヘルム写真　ローマ帝石玉ノ殿舎ヲ造リシ時用ヒシアカリ障子石　独乙国ビスマルク写真　独乙国軍事惣督（モルドゲ写真）」[註⑱]「外国郵便切手」など、前会にましての西欧文明進取の文物を出品している。また、医局や宮内庁・博物館からの出品は、蜷川式胤や町田久成らの働きかけによるものであろう。

前会に引き続き、今大会にも正倉院宝物を陳列するため、その展観許可を得べく、明治八年十二月、奈良県からは竹中参事と稲生真履小属の二人、奈良博覧会社から幹事一名が上京し、御開封及び展観許可の請願を行なった。そして翌九年の二月にその許可を得て、目録の御物が展観されるにいたったのである。ところが、ここに問題が残されている。この年の奈良博覧会には、正倉院宝物の展観は許可されなかったとする見解がそれである。[註⑲] 当時の実情と経過とをつぶさに語る資料はほとんど残されておらず、今となってはその真偽を明確にすることはできない。ただ、松島順正氏の御教示と、氏が多年にわたってまとめてこられた「正倉院年表稿」に

（明治九年）二月廿三日　奈良博覧会に御物貸与を許可す
二月廿七日　開封　勅使宮内権大丞堤正詮
六月廿六日　閉封　勅使宮内権大丞中山譲治

と、認められていることを指摘するにとどめておきたい。この問題に限らず、この時期の事象には不明確なことが多く、早急な結論は控えて今後の研究にゆだねるべきであろう。

## 四、おわりに

以上、奈良博覧会がどのような事情と経過とにより成立したのか、その原動力は何であったのか、そしてどのような物が展観されたのか、こうしたことに若干触れてきた。もとより、これで全部が明らかになったというのではなく、その一端を垣間見たにすぎないであろう。今後、研究を進めてより一層の充実をはかりたいと念じている。

小稿では以下のことを確認しておきたい。奈良博覧会を開催にいたらしめた背景には、明治五年の文部省による正倉院宝物・社寺宝物調査があったこと、とりわけ町田久成・蜷川式胤らの存在が大きかったこと。極論すれば、彼等の構想を反映した博覧会であったといえよう。また、明治八年・明治九年の展観目録は、当時の奈良における文化財所在目録の性格を持っていること。目録のなかには、その物自体についての伝来・由来を詳細にしているものがあり、個々の美術工芸品の研究に大きな手懸りを与えること、などである。こうした意味から、明治期の美術史研究や文化財保護行政の在り方を探る場合、本目録の存在は極めて重要な位置を占めると考えられる。

最後に、この両目録を紹介するにあたって、御配慮と種々御教示を賜った、奈良県立奈良図書館、および同館郷土資料室資料係長広吉寿彦氏、同館職員山上豊氏、東大寺、および東大寺図書館、同館職員の方々、とりわけ新藤佐保里氏に対し深甚の意を表する。また、御指導と御協力をいただいた正倉院調査員の松島順正氏、同保存課調査室長関根真隆氏、奈良国立博物館工芸室長河田貞氏、東京国立博物館学芸部資料課図書室長樋口秀雄氏、何かと御指導をいただいた関西大学教授有坂隆道氏に対し衷心より謝意を申し上げる。

註①　吉田光邦「京都の博覧会」『京都の歴史』八（昭和五〇年三月、京都市編）。

②　たとえば、安藤更生『正倉院小史』。

③　拙稿「「奈良博覧会」について」（「奈良県立美術館だより」第四号、昭和五一年）。拙稿「大和の漆工芸について」（「大和の漆芸」展、展観図録、昭和五一年）。

④　奈良博覧会社および奈良博覧会についての規則をまとめたものに、「奈良博覧会社規則完」、「奈良博覧会場規則完」、「奈良博覧大会規則同大会出品規則」の三部がある。このうち前二者は明治十年の刊行であるが、後者は不明。ここにまとめられた

内容は、少なくとも明治八年までに、その体裁を整えていたと考えられる。

⑤「第十三次大会保護願」（奈良県行政資料）。この保護願は、明治二十一年一月十日に奈良博覧会社社長鳥居武平、同社幹事小林芳辰、同鳥山喜造らが奈良県に提出した援助願文書である。

⑥蜷川式胤「明治五年正倉院開封に関する日記」（『東洋美術』特輯「正倉院の研究」所収、昭和四年）。『東京国立博物館百年史』資料編（昭和四八年）。由水常雄「明治五年の正倉院開封目録―蜷川式胤日記『奈良の筋道』より―」（『美術史』十八号）。

⑦のちに稲生は明治三十四年一月十九日、東京帝国大学史学会において当時の様子を講演している。稲生真履「正倉院勅封庫の記事」（『東洋美術』特輯「正倉院の研究」所収）。

⑧当時、奈良県社寺掛をつとめた大橋長意。

⑨『東京国立博物館百年史』一六二頁。

⑩石田茂作「法隆寺献納宝物の由来」（「ミューゼアム」二八二号）。

⑪藤田祥光稿「奈良博覧会」（奈良県立奈良図書館蔵「藤田文庫」所収）。

⑫『奈良国立博物館小史』（昭和三六年）。

⑬『東京国立博物館百年史』一六六頁。

なお、奈良博覧会の記録的概観を試みた別稿（「「奈良博覧会」について―明治初期の文化財保護行政に関連して―」『月刊文化財』二一七号掲載）もあわせて御参照いただければ幸いである。

両目録の翻刻にあたって、そのための凡例を記しておく。

## 凡例

一、明治八年の「奈良博覧会物品目録」（第一号～第十四号）、「会場第三区大仏殿内正倉院宝庫御物陳列目録」（第一号～第七号）は、奈良県立奈良図書館の架蔵にかかる。

一、「明治九年奈良博覧会物品目録」（第一号～第十五号）、「明治九年奈良博覧会大仏殿内正倉院御物陳列目録」（第一号～第四号）は、東大寺図書館の所蔵にかかる。

一、漢字はなるべく当用漢字を用い、異体字は正字に改めた。

ㅌはトモ、ㅌはトキ、コはコト、また片かなに用いている子はネ、井はキに改めた。

一、誤字はそのままにし、（マヽ）を傍記した。ただし、慣用的誤字には傍記を略した。なお、弘法大師など僧侶の大師号は太師も混用されているが、大師に統一した。

一、字配りはなるべく原本に近いことを期したが、組版の関係で、細字注記などの位置を適当な場所に移した場合が多い。

一、指図の位置も適当な場所に移した場合がある。また指図中の銘文で読みにくいため別記した場合（明治九年度分）は、（銘）で示した。

一、（　）を付して注記したものは、すべて筆者が加えた注記である。

# 明治八年　第一次奈良博覧会出陳目録

奈良博覧会物品目録　第壱号

会場陳列ノ物品ハ大半正倉院宝庫天武天皇ヨリ　孝謙天皇ニ至七朝ノ御物ニシテ何レモ一千有余年ノ物タリ加之法隆寺所蔵ノ聖徳太子ノ御物ヲ以テスレハ実ニ我朝古昔物品製造ノ宏大ナルヲ徴スルニ余リアルモノナレハ一々之ヲ図ニシ普ネク宇内ノ人ニ示シ以テ我朝千有余年前人智既ニ開ケ製物若此ニ巧妙ナルヲ知ラシメント欲シ頃ロ専ラ之ヲ模写スト雖トモ品類ノ夥シキ速ニ其工ヲ卒ヘ難ケレハ看官頻ニ遺憾ヲ訴ルヲ以テ更ニ又之ヲ録セリ其御物絵入目録ノ如キハ他日之ヲ鐫シテ示スベシ

第壱区壱号

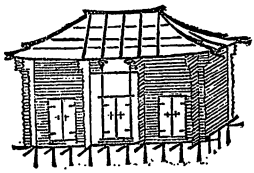
| | | |
|---|---|---|
| 俊乗上人笠 大仏殿再建ノ時住職 | 東大寺 | 同 |
| 柄香炉 | 同 | 同 |
| 俊乗上人杖 | 同 | 同 |
| 鉦鼓 僧公慶大仏殿再建勧進ノ時所用 | 龍松院 | 同 |
| 鉦鼓 俊乗上人所用 | 東大寺 | 同 |
| 華厳供印 | 同 | 同 |
| 良弁僧正硯 | 同 | 同 |
| 僧公慶杖 | 龍松院 | 同 |
| 俊乗上人脇息 | 東大寺 | 同 |
| 古鏡 | 同 | 同 |
| 大仏殿絵縁起 | 同 | 同 |

同　弐号

| | | |
|---|---|---|
| 釿金尺 | 龍松院 | 同 |
| 墨壺墨斧 僧公慶大仏殿再建上棟式匠具 | 同 | 同 |
| 大仏殿再建木牽図 | 東大寺 | 同 |
| 五獅子如意 | 同 | 同 |
| 聖武天皇御袈裟 | 同 | 同 |
| 良弁僧正袈裟 | 同 | 同 |
| 同　座具 | 同 | 同 |

同　三号

正倉院宝庫様式



鎌田喜平蔵

| | | |
|---|---|---|
| 勧進柄杓 俊乗上人所用 | 東大寺 | 東大寺 |
| 蘭奢待剪裁器械 | 原忠慎 | 原忠慎 |
| 天平年間革 | 東大寺 | 東大寺 |
| 油壺 元徳年間製 | 同 | 同 |
| 大仏殿古瓦 | 畑野治平 | 畑野治平 |
| 東大寺桝 | 薬師院 | 薬師院 |
| 大仏殿古瓦 天平年間製後有故周防国鯖川ニ沈没セシヲ或漁者網ニテ引挙ケタリト云 | 東大寺 | 東大寺 |

同　四号

| | | |
|---|---|---|
| 大安寺力士置物 | 林源七郎 | 林源七郎 |
| 福禄寿像 左甚五郎作ト云 | 中条良策 | 中条良策 |
| 春日八足台 | 小山田一義 | 小山田一義 |
| 牛玉 | 談山神社 | 談山神社 |
| 堆朱平卓 | 中村堯円 | 中村堯円 |
| 宣徳黄石公乗馬置物 | 同 | 同 |
| 古銅獅子置物 | 古寺忠八郎 | 古寺忠八郎 |
| 沈香製象置物　一対 | 松井又三郎 | 松井又三郎 |

土製鹿置物　上沢晋
同獅子置物　同
同人麿置物　同
石製獅子置物　松井又三郎
朱塗台　中村堯円
花台　仙洞御所ヨリ御賜ルト云　法隆寺
土製鬼面柱掛　上沢晋
木製布袋置物　畑野治平
木偶人　文化年間製　法隆寺
古銅獅子置物　小山田一義
桐材大手炉　薬師院
紫檀花台　同

同　五　号

古代硯　法隆寺
木製八幡太郎置物　森川善七
沈香踊布袋　林源七郎
木彫獅子香炉　南井蔵
紫檀卓　田村与根
唐産青貝製二重卓　原
竹台　小山田一義
神功皇后木製置物　森川善七
竹彫天台山置物　吉尾秀員
木牛置物　大化年間製　林源七郎
木製駒犬　一対　梅木春昇
春日砥石製駒犬　林源七郎
羯鼓台　法隆寺
模甲冑墨　大森善八
木製鬼念仏　小山田一義
碁枰　信長公ヨリ賜　小瀬孫作
碁枰　信長公ヨリ賜　小山田一義

同　六　号

唐織　衲袈裟　徳川氏ヨリ所賜　今春広成
白綸子網摺箔　同
羆毛赤頭　舶来ニテ作ルモノ　同
群鳥縫額　川上平九郎
粟鶉縫額　同
古椀子手鑑　岡本桃里
鶴之丸厚板　今春広成
紋綾著附　豊太閤ヨリ賜ルモノ　同
唐織　川上平九郎
雀縫　今春広成
土車厚板　川上平九郎
縷指額

同　七　号

伊達様君ケ代厚板　豊太閤ヨリ賜ルモノ　今春広成
繻子紋尽腰巻　豊太閤ヨリ賜ルモノ　同
金鉄線模様椀子　豊太閤ヨリ賜ルモノ　同
波龍縫御机掛　伏見文秀宮御出品
蜀紅錦　豊太閤ヨリ賜ルモノ　今春広成
牡丹獅子織半椀子　豊太閤ヨリ賜ルモノ　同

奈良博覧会物品目録　第弐号

ホラ地長錦　徳川氏ヨリ賜ルモノ　同
萌黄金菱椀子　同
金襴長範頭巾　今春広成
金菱巴小椀子　同

同　八　号

唐銅水注　松園家
梨子地台子　同
風炉釜　一式　同
茄子様茶入　大塔宮御所用　金峰神社
金林寺御茶入　後醍醐天皇御製　同
寸胡録水注　和角誠之
唐金自在　原忠慎
与次郎作釜　藤林善四郎
自在　利休所持　生島小三郎
夕顔彫台子　浄益浄雪作　小山田一義
連枝竹自在　沢庵所用　同

透木釜　古芦屋上平作　松園家
釜　中村益雄
蓋置　同
算子手風炉　小山田一義
毛織銅薬缶　和角誠之
純銀水注　小山田一義
古銅水注　同
風炉　中村益雄
杓立　同
建水　同
水注　同

同九号

小野小町木像　石上神社
玉　元興寺
八橋欄杭　石上神社
唐製牡丹唐草揚画蠟燭　松井又三郎
煙盤　豊太閤所用　岡寺
蝮骨　植田儀八
蛇頭骨　龍泉寺
飛弾国産篠魚　松井又三郎
青木香　孝謙天皇御物　法隆寺
古面　松尾寺
高灯檠　聖徳太子御所用　法隆寺
硨磲貝　古川孫市

大鵬鳥頭骨　畑野治平
馬玉　初瀬寺
牛玉　吉田松治郎
卒都波小町置物　水谷川家
鼠灯檠　長谷寺蔵

鼠灯檠図

天狗爪ト云モノ　談山神社
天狗爪ト云モノ　天川神社
雷臍ト云モノ　秋篠寺
土蜘蛛牙ト云モノ　葛城神社
彫虫　数百　左甚五郎作　林源七郎
達磨像　聖徳太子御作ト云　橘寺
唐木花瓶　水谷川家
一角脊骨　菅生善一郎
象皮　宝暦年間旧幕府所賜　松井又三郎
竹牛置物　服部伊八郎
三足蝦蟇　西京長平
煙管　阿闍陀製　吉川古摩吉
鹿角彫仏像　鎌鳳賀
巨貝　上田猶治郎

アイヲヒノツル竹　当麻寺
煙管　明製　和角誠之
魯西亜製煙管　笹井忠平

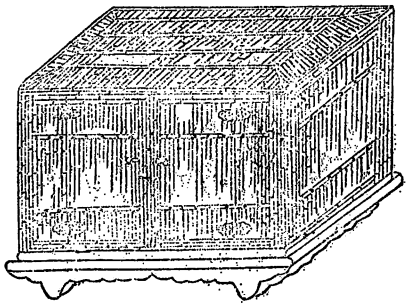
同十号

蔦細道硯函　石上神社
堆朱花鳥食盒　小瀬孫作
桃形練物硯　華園家
籠組食籠　唐製　小山田一義
唐製炉屏　同
青貝人物花鳥料紙文庫　水谷川家
青貝花鳥揚模様印箱　唐製　同
硯　同
螺鈿蠟石花鳥人物印箪笥　唐製　同
曲輪四足卓　同
梨子地切模様提重　小山田一義
色推朱三重手提　生島小三郎
菊画金銀嵌入香木硯　喜多弥平
支那霊主厨　千載伝吉
賢聖瓢

高五寸七分
口径三寸五分
聖徳太子
御所用
法隆寺蔵

竹簞笥　高一尺六寸二分　横二尺四寸四分　幅一尺二寸七分

聖徳太子御所用



法隆寺蔵

古銅風炉　高九寸三分　口径九寸八分

法隆寺蔵

奈良博覧会物品目録　第参号

銀銅水瓶　高一尺五寸

法隆寺蔵

同十壱号

花鳥描金銀金具小簞笥　喜多弥平
御硯　伏見文秀宮
宝来山描金御料紙　同
花鳥高描金御側棚　同
螺鈿冨士描金机　喜多弥平
銀波水晶置物　華園家
丁子車灑金硯箱　同
秋草描金百眼厨　西京華園家
寄木描金懸硯　同
菊描金見台　伏見文秀宮御所蔵
牡丹孔雀描金硯函　水谷川家
梨子地唐草描金茶簞笥　松園家
松竹梅描金机　同
七宝蝶描金手提　小山田一義

同十二号

純銀丁子風炉　松園家
葵紋描金紙台　原忠慎
螺鈿純銀菊紋面函豊太閤ヨリ賜フモノト云　小山田一義
千鳥硯箱　足利慈照院所玩ト云　西宮秀国
石竹子描金硯箱　伏見文秀宮御所蔵
梅松桜描金厨子棚　福井伊一郎
山水描金文台　松園家
純銀金嵌入漢皷香炉　水谷川家
山水描金硯函　松園家
銀杖　伏見文秀宮御所蔵
花鳥描金見台　水谷川家
麒麟描金香盆　島田平三郎
梨子地葵紋大重箱　松園家
梨子地住吉描金手箱　田村ヨネ
嵌玉麒麟鳳凰杖製眼鏡　水谷川家蔵
後水尾院天皇御物　長二尺八寸

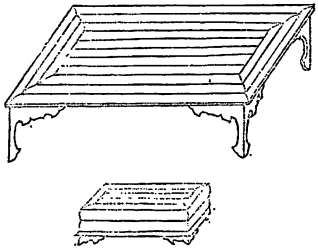
同十三号

花鳥描金紙台　水谷川家
菱描金手提　小瀬孫作
料帋硯　吉野立田　水谷川家
料帋文庫　吉野立田　水谷川家
七宝描金錫銅製煙盆　同
菊唐草彫銀釜　同
梨子地桐描金香枕　葛城徹玄
梨子地描金香盆　小山田一義
片輪車箱　法隆寺蔵
高三寸二分　横七寸九分　幅五寸五分
聖徳太子御所用

千鳥文台　法隆寺
扇面描金文庫　原忠慎
描金食籠　小山田一義
松竹梅唐草描金硯函　原忠慎
女郎花描金提重　島田平三郎

---

葵描金文台　原忠慎
山水描金煙盆　水谷川家
竹文台　硯箱
金峰神社蔵
伝云
後醍醐天皇御物



同十四号

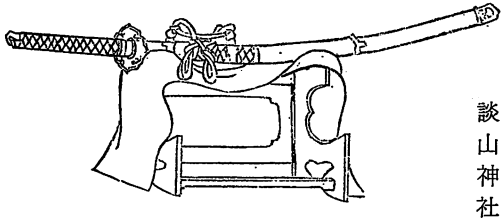
刀　銘国行　秀吉公寄附　談山神社
刀　銘国行　高柳寄附　同
兜　楠正成所持　信貴山
短刀　東照宮寄附　談山神社
短刀　無銘　春日神社
短刀　同　同
短刀　同　談山神社
短刀　銘天国　同
短刀　銘秀助　同
短刀　銘宝寿　同
短刀　無銘　春日神社
十文字鎗　銘兼若　杉原直博

---

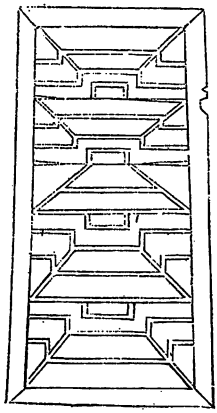
十文字鎗柄　同

奈良博覧会物品目録　第四号

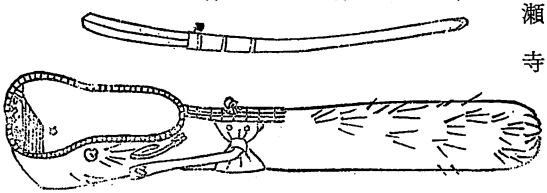
短刀　銘吉光
後水尾院天皇御太刀
銘延吉
長二尺八寸
水谷川家蔵
金装菊唐草毛彫鞘描金螺鈿
菊ノ紋束糸紫
神楯　長三尺七寸七分　横一尺九寸五分
石上神社蔵



談山神社



短刀　保正五郎作　談山神社
短刀　銘長重　同　仏隆寺
剣　覚鑁上人所用　談山神社
短刀　銘包清
長刀　吉野郡之内九ケ村持
短刀　銘則長　談山神社
矢根　同
短刀　銘宝寿　同
短刀　銘国重　同
団扇　家康公所用　初瀬寺
白鞘大刀　信長公寄附　談山神社
鉄鞘太刀　長壱尺弐寸四分　龍田神社蔵
靱　楠正成所用　長三尺弐寸五分　楠三良平蔵



剣　銘宝寿　談山神社
太刀　無銘　吉野郡ノ内九ケ村持
剣　無銘　大和神社

同十五号

甲冑　楠田勝三
鎧　家康公所持　宮司篤見
赤銅製太刀　春日神社
短刀　無銘　同
短刀　銘村政　同
緋縅鎧　同
兜　義家公寄附　同
兜　義経公寄附　同
緋縅鎧　同
兜　義家公寄附　同
黒皮縅鎧　同
兜　自天親王御所用　吉野郡ノ内九ケ村持
兜　楠公寄附　春日神社
黒糸縅鎧　同

同十六号

鎧袖　自天親王御所用　吉野郡ノ内九ケ村持
箙　大谷源十郎
割蛇剣　銘行光　金峯神社
鎧　聖徳太子御所用　大和神社
短刀　守屋大臣所用　同
南蛮鉄鞍骨　楠公所用　信貴山
晨命宮旗頭　筒井順昭寄附　同
大塔宮咽輪　同
楠公鎧袖　同
短刀　銘盛光　談山神社
刀　同
短刀　銘兼光　同
刀　銘天国　同
刀　文珠四郎　当麻寺
短刀　菅原神社
長刀　秦川勝所用　大和神社
刀　銘了戒　談山神社
鎌鎗　鎌胤賀
同　同
朝鮮鎗　小山田一義
刀　銘家助　近衛関白公ヨリ寄附　春日神社
蒙古剣　西大寺

## 奈良博覧会物品目録　第五号

太刀　彦根城主直弼所献　春日神社
佐藤忠信兜　金峯神社
凸鮫短刀　波平昌行作　片岸福太郎
太刀　浅野内匠頭所持　原忠慎

太刀　和角誠之
竹鞘太刀　杜園作　古寺忠八郎
短刀　和角誠之
神息刀身　法隆寺
刀　上沢晋
太刀　大塔宮御所用　岩田神社
刀　銘大和国住藤原政長作　大職冠神宝　永正三年十一月日　談山神社
太刀　龍泉寺
小手　義経公所用　春日神社
轡　銘松虫　義経公寄附　同

同十七号

矢　神功皇后御所用　般若寺
鎧　法隆寺
梓真弓　聖徳太子奥州安達原ニテ獲玉フモノ　同
唐鞍　手向山神社
鏑矢数矢
胡桃矢　聖徳太子御所用　法隆寺
矢筒　楠公所用
唐鞍輪鐙　金峯神社
面頬　手向山神社
刀　銘照重　法隆寺
村上彦四郎兜鉢　信貴山
刀　銘来国俊　原忠慎

五本卒都婆鍔　村上彦四郎所用　金峯神社
甲　武田信昌所用ト云　梶田文平
鐙　聖徳太子御所用　法隆寺
壺鐙　手向山神社
矢母衣　熊沢蕃山所納　大神々社
大弩模　梶田文平
熊谷直実鞍　裏ニ円光大師六字名号真蹟アリ　阿弥陀寺
白材鞍　手向山神社
太刀　銘天国　達磨寺
劔　無銘　天川神社
七曜劔　聖徳太子御所用　法隆寺
楯　大神々社
兜　奥州藤原秀衡所献　法隆寺
古劔　無銘　大和神社
劔　銘国吉　同
劔　三本　本多中務少輔忠為　同　同　甲斐守忠氏所献　能登守忠義　龍泉寺

同十八号

空也上人木像　福井みね
持蓮華　恵心僧都作　招提寺
金銅観音　小山田一義
蛮絵獅子摺板　法隆寺
紫銅毘沙門天　山崎長者念持仏　距今凡九百三十年　信貴山

八大龍王牛王板木　龍泉寺
仏舎利　伝言春日明神御感徳舎利　春日神社
根来長台　小山田一義
泥仏　招提寺
金銅毘沙門天　距今凡八百年　信貴山
舎利塔　法隆寺
優天王木刀　般若寺
銅製毘沙門天　楠正成念持仏ト云　金峰神社
金銅毘沙門天　同　信貴山

同十九号

春日仏舎利　春日神社
遺身舎利　招提寺
銅仏　岡本桃里
古塔　同
馬頭夫人　唐宗僖作ト云　初瀬寺
仏舎利塔　般若寺
金銅仏十一体　法隆寺
古仏六体　岡本桃里

同二十号

役行者木像　前鬼後鬼添　立花英三
持国天木像　法隆寺
板仏　同
金銅阿弥陀仏光背　同

多聞天木像　同
五大明王　弘法大師作　当麻寺
金銅薬師如来　用命天皇勅願　有銘数字ナル故ニ不記載　法隆寺
土偶人十一体ノ一　法隆寺蔵

金銅仏四拾八体ノ一　法隆寺蔵

第二区壱号

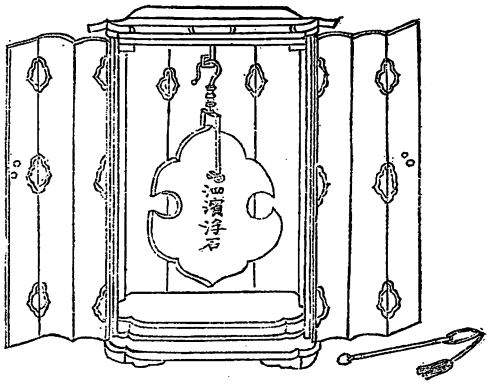
鈴三鈷　法隆寺
独鈷　弘法大師所用ト云
柄香炉　山背大兄王子御所用　同
錫杖　役行者所用ト云　同
香炉函　同
真珠　同
飛鉢　鳥羽僧正飛蔵絵巻物添　信貴山
滅金香筥　法隆寺

滅金経筒　右大臣道長所献　金峰神社
柄香炉　法隆寺
木鉢　弘法大師所用　同
弘法大師頭髪　般若寺
五鈷鈴　談山神社
五鈷鈷　信貴山
古銅鰐口　和角誠之
沓　鳥仏師ノ作　法隆寺

奈良博覧会物品目録　第六号

古銅水瓶　命蓮上人所持　信貴山
独鈷　僧空海所用　室生寺
琥珀念珠　法隆寺
華原磬　元興福寺所蔵

泗濱浮石　元興福寺所蔵




同弐号

磬　小山田一義
柄香炉　恵慈法師所持ト云　法隆寺
木鉢　達磨大師所用ト云　同
如意　水谷川家
独鈷　松岡秀賛

三鈷　同
五鈷鈴　伝教大師所用ト云　金峰神社
如意　行信僧都所用ト云　法隆寺
柄香炉　同
塔鈴　慈覚大師伝来ト云　橘寺
古代真珠　法隆寺
古鈴　天川神社
古代梵鐘片　仏隆寺
鉄鉢　恵慈大師所用ト云　法隆寺
王子方水瓶（形）　同
龍頭鈴　金峰神社
行信僧都鉄鉢　法隆寺
古代砂張仏器　同
唄多羅葉　天川神社
同　般若寺
般若寺額　嵯峨天皇宸筆　法隆寺
錫杖　役小角大峯山開闢ノ時所用ト云

同三号

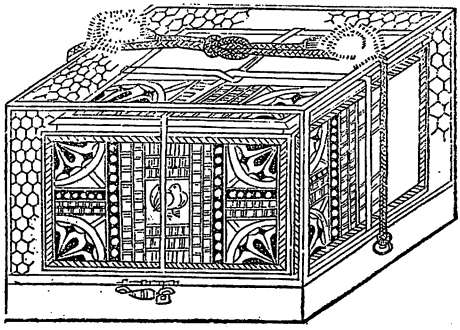
磬　法隆寺
推古天皇宸翰　同
不明門額　同

古銅油瓶　同
古額　秋篠寺
龍蓋寺古額　岡寺
古代五綴鉄鉢　法隆寺
金滅金経筒　金峰神社
如意　僧覚範所用ト云
孝謙天皇刀子　法隆寺
刀子　聖徳太子仏像彫刻ノ時用キ玉フト云　同
沈水香　世尊寺
経机　同

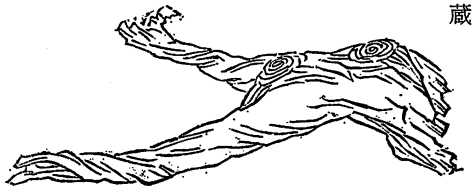
同四号

石筒羯鼓　百済国ヨリ持来　法隆寺
笙　行円作　談山神社
黒筒羯鼓　法隆寺
黒筒　支那製　薬師寺
田楽太鼓　田楽法師所用ト云　手向山神社
太鼓胴　唐対　法隆寺
鼓胴　頼朝公所献　同
毅鼓　聖徳太子御所用　信貴山

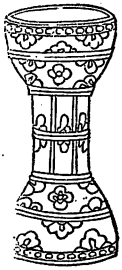
笙　銘鶯丸　水谷川家
鼓胴　法隆寺
琵琶　蟬丸所用ト云　金峰神社
兆鼓　信貴山
服鼓　陰度製　同
寄木手筥　法隆寺蔵



沈水香　法隆寺蔵



三皷胴　法隆寺蔵



同　五　号

龍笛　銘十六霄　水谷川家

笙　頼尊作　談山神社

琴　銘音延　水谷川家

古代箏柱　法隆寺

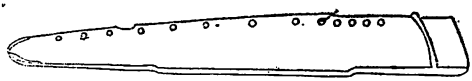
七弦琴　琵琶　銘立田　水谷川家

同

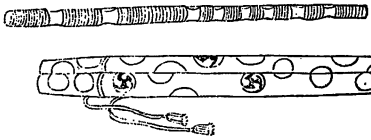
奈良博覧会物品目録　第七号

七弦琴　百済国ヨリ齎来　法隆寺蔵

裏銘　開元十二年歳在甲子五月五日於九瀧県造



横笛　平相国清盛公所玩ト云



琴　銘暁鶯

水谷川家蔵

七文字龍笛　後醍醐天皇御銘　金峰神社

高麗笛　同

国軸丸笙　後醍醐天皇御物　同

同　六　号

皷　二ツ　小山田一義

奚婁胴　手向山神社

御嶽丸笙　後醍醐天皇御物　金峰神社

初音皷胴　静所用ト云　大谷源十郎

蛇味線　小山田一義
阿蘭陀鼓弓　林源七郎
神楽数取滅金鈴　小山田一義
九鈷鉾　談山神社
古代木製徳利　小山田一義
木彫獅子　一対　葛城神社
嵯峨天皇宸翰額　同
木製鞆　手向山神社
高倉天皇所賜（ママ）　淡山神社永補任印　談山神社

同　七　号

綾蘭笠（アヤイ（ママ））　手向山神社
楯　同
竹箙　同
台付鈴　唐鞍用　同
螺鈿覆輪鞍　手向山神社
此器大仏殿再建ノ時頼朝公羈留人宋ノ陳和卿ニ賜フ然ルニ陳和卿ヨリ八幡宮転害会十列馬具之中エ奉納ト云々
上代鎌　法隆寺
上代鋸　同
続帯　手向山神社
唐鞍皆具　同
競馬太刀　正和年間製　同
木製瓶子　同
冠　業平朝臣所持ト云　大和神社

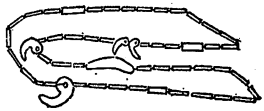
左筆切付　手向山神社
沓　同
菅公土像　本善寺
木製刀子　手向山神社
柿本人麿木像　北浦義十郎
紀有常木像　本善寺
古鏡　大神神社蔵

同　八　号

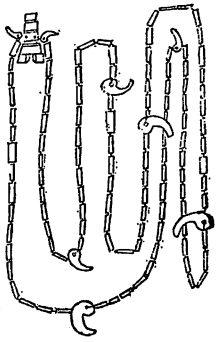
羈　手向山神社
杏葉轡　同
尾袋　同
唐鞍手綱　同
雲珠　同
唐鞍八子　手向山神社
雲甲　同
唐鞍輪鎧　同

傘鷺　同
革製伽陵頻迦羽　同
唐鞍三子　同
水晶玉　春日神社
管石曲玉　同

石上神社所蔵

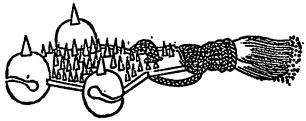


唐鞍手綱　手向山神社
轡　同
御鏡台　春日神社
鏡　同
鹿ノ玉　同



# 奈良博覧会物品目録　第八号

御褥　春日神社
八花形鏡　同
御畳　同
金張笠　近衛基前公所献　同
古鉾　時風秀行所持　同
鬼鈴　裏銘天暦三年酉二月　和角誠之所蔵



神宝鈴　裏文禄二癸酉二月肥後守藤原清正　龍田神社所蔵

鎧　聖徳太子御所玩俗ニ指ノ鎧ト云　法隆寺

同　九号

古鏡　妹子臣支那衡山ヨリ取寄タルモノト云　法隆寺
古鏡　和角誠之
古鏡　二面　法隆寺

---

古鏡　二面　同
同　唐製　醍醐天皇御物ト云　同
亀鏡　楠正成公ヨリ賜ルモノト云　信貴山
彫梵字大鏡　藤林和清
神鏡　小山田一義
古鏡　銘五字登料唐製　天川神社
古鏡　林源七郎
同　松園家
同　法隆寺
唐草八花形鏡　船宿寺
丁子様古鏡　小山田一義
三国伝来鏡　商算上人所玩　同
八花形古鏡　金峰神社
神宝鈴　小山田一義
古鏡　龍田神社
龍門寺古瓦　大和神社
古硯　金峰神社
銅雀台古瓦硯　菅原神社
崐玉硯石　水谷川家
鶏血硯　金峰神社
断牌硯　小山田一義
大仏殿古瓦　同
端溪硯　水谷川家
瓦硯　未央宮ノ古瓦ヲ以テ作ルモノト云　畑野治平
金峰神社

---

鷹形硯　梁武帝所玩ト云　松井又三郎
未央宮瓦硯　水谷川家
模華原磬墨　松井又三郎
方鏡　小山田一義
古鏡　楠公所用ト云　西村堯円
蘭亭硯　葛城真紀
馬蹄研　小山田一義
墨　明于魯按製　千載伝吉
円大墨　大森善八
六角大墨　松井又三郎
犀角筆洗　同
古銭　初瀬寺
線香筒　唐製　岡本桃里
銅硯　唐製　小山田一義
及台硯　同
端溪硯　松井又三郎
唐硯　大森善八
古銅鯉魚置物　小山田一義
自然石硯　林源七郎
古鏡　朱子所用ト云　岡本桃里
古銭　十弐枚　談山神社
十二支印籠　林源七郎
上代鐃　小山田一義
土鈴　法隆寺
北浦義十郎

漢皷提物　杜園作　小山田一義
銅鈴　同
銅鈴　同
鈴　同
金銀描金筥　同
管石　弐拾　同
白玉管石　同
石劔頭　同
鈴　弐ツ　同
古鈴　弐ツ　同
矢ノ根　春日神社
印籠　法隆寺
法隆寺古印　推古天皇所賜ト云　同
勾玉　小山田一義
金環　五　同
銀環　同
鵤寺倉印　平城天皇所賜ト云　法隆寺
青鈴玉念珠　同
銀簪　同
針筒　同
鰐口　同
石名取之玉　同
火取玉　珊瑚玉　同
水晶玉　小玉　水晶玉　同
神代古鈴　和角誠之

古鏡　二面　同
鬼鈴　銘云天暦三年酉十二月　同
古碗　安政二年六月早皷ノトキ神殿村農石田嘉兵衛灌漑ノ為田中ニ井ヲ掘ルコト一丈余ニテ此ニ獲タリ　北浦義十郎
銅銭　同
西大寺古印　西大寺
金銭　北浦義十郎
大銭　崇寧重宝　同
古銭　同
文字銀　同
古銅印　上田晋
唐製錠　和角誠之
瓢様錠　同
瓜様錠　同
古鈴　天川神社

## 奈良博覧会物品目録　第九号

青磁浮牡丹大花瓶　高二尺九寸五分　口径一尺　金峯神社蔵

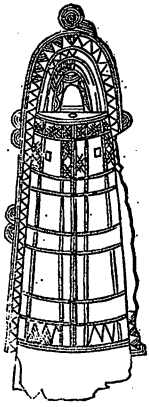
青磁手炉　薬師院
浮牡丹花瓶　一対　法隆寺
南京窯染着手炉　笹井忠平
南京窯染着墩　白井平九郎
火炉　支那製　大森善八
根来円形台　中村堯円
青磁硯屏　初瀬寺

青磁酒会壺　小山田一義
土製武田信玄置物　萩原喜七郎
青磁布袋　松井又三郎
古壺　法隆寺
茗壺　杉原直博
青磁塔　笹井忠平
青磁人形様鉢　小山田一義
青磁徳利　第七大区会議所

## 同十号

## 同十壱号

天ノ半鐸　高二尺七寸　秀吉公ヨリ源蔵ヘ賜フモノ　秀吉公ノ書翰添　金峯神社蔵



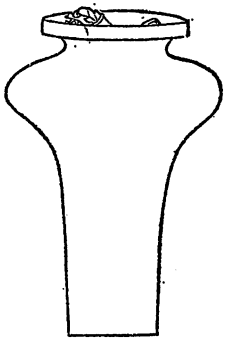
銅鼎　大森善八
唐銅盂　林源七郎
上古水瓶　法隆寺
南円堂灯籠扉　銘橘逸勢筆ト云　元興福寺　小山田一義
古銅大花瓶　法隆寺
古銅炉盤　舟橋勇
古銅鼎　法隆寺
金山寺香炉　小山田一義
銅爵　唐製　法隆寺
古銅炉盤　長谷寺
古銅獅子　楠正成寄附　小山田一義
銀嵌水注　同
土焼大壺　秀吉公所用　同
唐製瓶掛　同

同十二号

唐銅涼炉　小山田一義
馬足台　同
古銅豆盤　支那製　同
紫檀角台　同
金滅金花皿　同
水注　唐製　清水浪江
元興寺露盤鈬　談山神社
栗原寺露盤　小山田一義
竹台

大手炉　同
同　明宝庵作　岡本桃里
大塔宮鉄　同
古銅花炉　萩原喜七郎
西大寺卣　高八寸五分　西大寺蔵

唐銅火炉　小山田一義
古銅円形火鉢　古寺忠平
古銅錞　高一尺八寸　小山田一義蔵

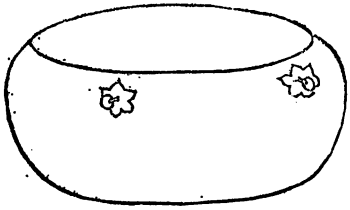


古銅擬宝珠　法隆寺
銘云法隆寺御舎利殿豊臣氏内大臣秀頼公御再興也慶長十年亥月日奉行片桐東市正且元

籠様花瓶　唐製　小山田一義
沙張平鉢　中村堯円

同十三号

鶏香炉　上田孫三郎
銅鑼　大森善八
大鶴香炉　一対　椿本伊作
春日水瓶　小山田一義
銅鑼　同
銀嵌鉄風炉　竜文堂作　同
大斗　法隆寺蔵
銘云重大廿六斤受壱石四斗口径二尺三寸七分



古代風炉　聖徳太子御所用　法隆寺
小判形砂鉢　古寺忠八郎
青銅花瓶　島田平三郎
滅金水器　唐製　林源七郎

花瓶　二ツ　法隆寺
古銅花瓶　島田平三郎
唐銅棗様風炉　小山田一義
金紫銅花瓶　中村堯円
古銅花器　小山田一義
朝鮮製半銅　大仏殿再建ノ時頼朝公所用　原忠慎

同十四号

砂小石　四箱　岡本桃里
銚子石　談山神社
陽石　薬師院
鳩石　林源七郎
鹿足蹟石　清水浪江
布留川烏帽子石　森照燕
大蛇鮫石　龍泉寺
此他数十百種アレトモ紙数ノ浩瀚ヲ患ヒテ之ヲ省クナリ

同十五号

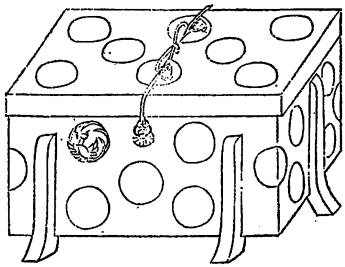
大安寺古瓦　銘大安寺　菅公真跡　橋本藤一
当麻寺古瓦　同
国源寺古瓦　同
元興寺古瓦　同
菅原寺古瓦　同

## 奈良博覧会物品目録　第十号

阿州下太子中興瓦　橋本藤一
巨勢寺古瓦　同
建仁寺古瓦　同
築地古瓦　同
新薬師寺古瓦　同
超昇寺古瓦　同
達磨寺古瓦　同
法華寺古瓦　同
金剛院古瓦　同
東福寺古瓦　同
興福寺古瓦　同
大極殿古瓦　同
飛鳥寺古瓦　岡本桃里
朝妻寺古瓦　橋本藤一
光明皇后御建立浄土院古瓦　同
春日東塔古瓦　同
大官大寺古瓦　同
大安寺伽藍片瓦　銘大安寺　菅公真蹟ト云　中村堯円
春日西塔古瓦　橋本藤一
若桜宮古瓦　岡本桃里
土仏　同
鶏瓦　同
泊瀬別城古瓦　同
橘寺古瓦　同
礒城島古瓦　同
朱雀門古瓦　同
聖徳太子御学問所古瓦　同
大内裏古瓦　同
皇極天皇御宮跡古瓦　同
栗原寺古瓦　同
招提寺瓦　同
羅生門古瓦　同
大政官古瓦　同
高明親王御旧地　姪子森古瓦　同
阿州駒ケ谷　金剛輪寺古瓦　同
古瓦　銘和多羅半錦　清水浪江
備中吉備津宮古瓦　橋本藤一
出雲国国分寺古瓦　同
法金剛院古瓦　同
新田部親王御旧地古瓦　同
洛西高雄　神宮寺古瓦　同
古瓦　銘龍田河　清水浪江
筑前都府楼古瓦　橋本藤一
東大寺西大門古瓦　同
武蔵国国分寺古瓦　同

## 同十六号

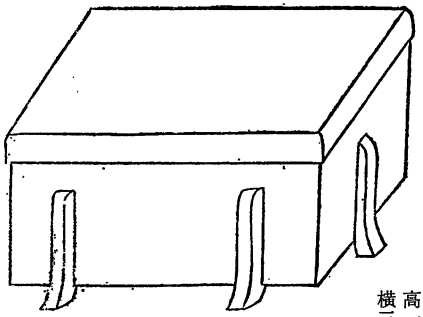
不滅貝褥入　聖徳太子御物　高一尺四寸二分　横二尺六寸五分　法隆寺蔵



古枡　薬師寺
同　六ツ　北浦義十郎
後醍醐天皇宸翰　金峰神社
勧進杓　薬師寺
金伏枡　同
楠正成菊水籏　信貴山
長器桝　慶長年間所製　招提寺
古枡　畑野治平
中古小枡　法隆寺
春日八足台　片岸福太郎
古代釣枡　法隆寺
糞掃衣　法隆寺
三社詫宣　聖珍法親王御筆　片岸福太郎

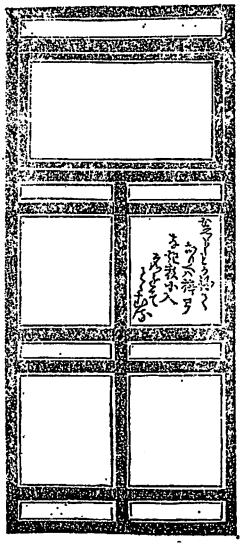
## 同十七号

唐櫃　南朝敗績ノ時大塔宮蔭レ玉フモノ　高一尺七寸　横三尺四寸五分



御褥椀子　聖徳太子御所用ト云　同
麻御袈裟　聖武天皇　東南院
蜀紅褥椀子　法隆寺
達磨大師袈裟　同
能曽姫夏褥　同
褥　同
広東古椀子　聖徳太子御所用ト云　同
袈裟　定恵和尚所着ト云　談山神社
大塔宮陣羽織　金峰神社

御足印　聖徳太子御所用　法隆寺
円座具　聖徳太子御所用ト云　同
柄香炉　同
玉盃　二　同
聖徳太子御製笛　同
如意輪寺扉　塔尾御陵附宝物
小楠公最期歌　高五尺九寸　横二尺二寸五分



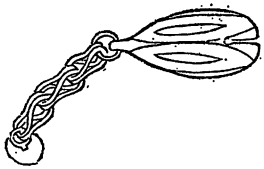
# 奈良博覧会物品目録　第十一号

小幡　聖徳太子御所着　法隆寺
糞除衣　聖徳太子御所着　同
伊都内親王願文　橘逸勢筆　水谷川家

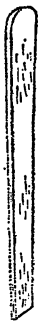
## 同十八号

周尺　法隆寺蔵

称賛浄土経　同
推古天皇御几帳之鈴　法隆寺蔵



聖武天皇夏御褥　法隆寺
西大寺伽藍絵　元録十一年写（ママ）　談山神社
聖徳太子伝記　法隆寺
鸚鵡形毯代　孝謙天皇御物　同
孝謙天皇御褥　東大寺
釈迦文殊維摩三体図　法隆寺
旗　和銅年間製　信貴山
法然上人一代記　四十八巻　法隆寺所蔵
推古天皇御笏



## 同十九号

鷲画　帳情筆　葛城保義
白河法皇御輿餝　法隆寺
聖徳太子夏御褥　同

観音荷葉厂　関山国師筆　金峰神社
手鑑　表紙吉野立田ノ画　水谷川家
孝謙天皇御献物帳　法隆寺
謝時臣自画賛　松井又三郎

## 同二十号

后漢承仲碑　大森善八
頼朝公教書　義経ノ首刎ヘキノ文字アリ　金峰神社
手鑑　招提寺
維摩経　談山神社
法華経　同
祝枝山筆　水谷川家
十六善神画　信貴山
天馬賦　董其昌筆　招提寺
法華経　用明天皇宸翰　法隆寺
解脱上人筆　招提寺
紺紙金泥大乗妙典　伝教大師真蹟ト云　松園家

## 同廿一号

梅月画　王牧筆　松園家
権現講式　談山神社
弘法大師筆　竹田節
銭舜挙布袋画　古川弥三郎
古人手簡帖　金峰神社

極楽院古図　聖徳太子御一代　極楽院
四幅絵殿　法隆寺
唐大智禅師碑　大森善八
山水画　張曽筆　松井又三郎

## 同廿二号

解脱道論　光明皇后御筆　大森善八
山水画　張曽筆　松井又三郎
画帖　招提寺
祝枝山書　松井又三郎
白紙金泥華厳経　東大寺
義輝公墨印　金峰神社
秀吉公墨印　同
秘密縁記　同
楠正成最期状額　信貴山

## 同廿三号

官符御代々国判　栄山寺
官符御国判目録　同
善尊曼陀羅　阿弥陀寺
紺紙金泥華厳経　天川神社
行成卿真蹟　松井又三郎
竹画　梅道人筆　水谷川家
東征伝絵巻物　招提寺

東征伝絵縁起　同
竹鶏画　辺景照筆
いろは歌　弘法大師真蹟

同廿四号

二月堂縁起　東大寺
金剛般若経　管生善一郎
聖徳太子伝記　談山神社
古人書画鑑　初瀬寺
新田尊氏義政三将軍教書　法隆寺

同廿五号

大威徳明王画　信貴山
経会本尊　談山神社
薬師寺縁起　薬師寺
愛染明王縁起　無品親王御筆　長岳寺
朗詠集　法隆寺
聖徳太子像　周文筆　達磨寺
小野法橋重勢筆　古川孫一
当麻寺縁起　当麻寺
大安寺縁起　菅公筆　西大寺
三十六歌仙画　信貴山
達磨大師画像　達磨寺
護良親王御詠歌　吉野郡十津川郷芦河ニテ詠シ玉フモノ　十津川郷各村持
古旗一　同

## 奈良博覧会物品目録　第十二号

### 第四区一号

唐江文通書　初瀬寺
大峰再建縁起　金峯神社
後宇多院天皇宸翰　東大寺
義持公寄附状　同
頼朝公筆　同
義政尊氏両公筆　同
執金剛神縁起　同
雲雀山縁起　青蓮寺
小野篁真影　弘仁寺
弘法大師真影　同
唯識論　薬師寺
法華曼多羅　談山神社
大職冠鎌足公真影　同
紺紙金泥華厳経　東大寺

同二号

九條道家公手簡　水谷川家
十六羅漢像　十六幅　東大寺
仏名経　法隆寺
手鑑　表紙袁胡蝶舞　水谷川家
白楽天参道図　趙子昂絵蔣衡賛　小山田一義

秦御史程邈漢張衡晋王羲之　法帖　同
頊真天子経　聖武天皇宸翰　東大寺
大鵬和尚墨竹　松井又三郎
鑑真泥書金剛経　招提寺

同三号

呪字織物　理源大師筆　法起寺
楠公軍記　天巻　三巻　東大寺
独股　明王院
般若心経　弘法大師筆　初瀬寺
感得独股杵讃　同
古今目録（ママ）鈔　法隆寺
大般若経　僧覚鑁筆　金峯神社
証菩提院地蔵縁起　東大寺
紛失証券　金峯神社
程君房墨苑　松井又三郎
紺紙金泥法華経　光明皇后御筆　薬師寺
明硯隠子書　大森善八

同四号

弘法大師筆　信貴山
普門品　中条姫真跡　松園家
心経　弘法大師筆　天川神社
源氏供養　文明五年製　同

楠氏系図　後醍醐天皇御物　金峯神社
大般若経　伝教大師筆　招提寺
供料御寄附状　法隆寺
法華経　僧孝仁筆　同
良遍手蹟　同
禁裏御祈禱状　同
大方広仏華厳経　同
法隆寺聖霊会再興状　同
唱礼　僧聖宝筆　談山神社
法華経　中将姫筆　同
仏説海龍王経　聖武天皇宸翰　海龍王寺
自在王経　光明皇后御筆　同
般若心経　僧弘法筆　同
多羅葉梵書　伝云天竺僧侶ノ筆　同
十六羅漢画像　東大寺
三蔵絵巻物　松園家
晩香堂蘇帖　東坡書　細川六三郎
楠公書　長〻（空白）

同五号

新田義貞手簡　長谷寺
聖徳太子四巻義疏　法隆寺
大般若経　吉備大臣筆　招提寺
多武峰縁起　一条兼良公書　土佐光信画　談山神社
名香記　呂空筆　東大寺

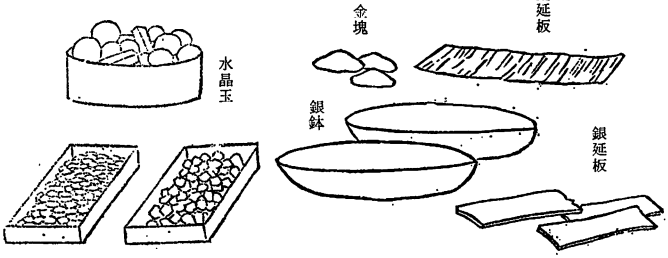
同六号

方等経　聖武天皇宸翰　東大寺
威徳経　光明皇后御筆　同
繡仏　法隆寺
多羅葉梵書　同
竹帙　二枚　法隆寺
大日経　僧一行筆　壺阪寺
玉簾　上田猶次郎
三峡図　陳化龍筆　高橋守直
王若水画　水谷川家
達磨（ママ）縫絵　中条姫製　第七大区会議所
法華経　弘法大師筆　空海寺
古田券　招提寺
般若心経　近衛家照公筆　橘寺
壺阪観音縁起　壺阪寺
八幡宮縁起　二条照実公筆　中村堯円
史義昭書　松井又三郎
銭舜挙花鳥画　岡寺
新田義重筆　談山神社

同七号

張郎真蹟　今春広成
班彦功書　松井又三郎
九英書　水谷川家

唐江文通書　長谷寺




以上数品。明治七年元興寺金堂須弥壇下ヨリ所堀出

奈良県庁ヨリ拝借品

奈良博覧会物品目録　第十三号

同　八　号

馬図　趙子昂筆ト云　今春広成
元洪恕書　松井又三郎
愛葵書　同
舞楽面　法隆寺
毘沙門古面　同
鯉魚図　牧溪筆　古川弥三郎
胡飲酒面　手向山神社
明董延画　松井又三郎
古面　岡本桃里
妙喜院古瓦　俗ニニコ々々瓦ト云モノ　同
七賢画　趙子昂筆ト云　松井又三郎

同　九　号

翁面　芝小路豊訓
退宿徳面　手向山神社
皇仁庭面　同
地久面　長久三年製　同
不動面　伝云金剛太夫肉附　芝小路豊訓
舞楽面　信貴山
陵王古面　正保元年製　東大寺
明画　無款　松井又三郎
新鳥蘇面　長久三年製　手向山神社
宗陳所翁画　水谷川家
休文画　松井又三郎
還城楽古面　法隆寺
八雷神面　元興寺
勧盃面　手向山神社
還城楽面　支那製　薬師寺
愛羊画　水谷川家
一休和尚書　金峯神社
四明山人具鉱画　談山神社
古面　弘法大師作ト云　橘寺
翁仮面　聖徳太子御製　同
妓楽面　三十一　法隆寺
按摩二儛腫面　手向山神社
胡徳楽面　永楽元年製　同

同　十　号

気吹面　龍田神社
五仏面　岡本桃里
妓楽古面　東大寺
貴徳面　手向山神社
皇仁帝古面　長久年間製　同
古面　数百　同

同　十　壱　号

綱　蝦夷ニテ用ヰルモノ　博覧会事務局ヨリ拝借品
バツカソタレ　同　同
烟草入　同　同
杓　同　同
木刀　蝦夷製　同
石杵　同　同
袋　同　同
櫂　同　同
敷物　同　同
沓　同　同
梭　同　同
古盃　和田酒宴ノ盃　鶴ケ岡別当所持　蟷川式胤
銅版図　同
刀　蝦夷製　西京談海槐堂
樺太杓　同
茶台　同
盆　同
鳥卵腐敗ヲ試ル目鏡　蟷川式胤
麻布見手本　塊国製　博覧会事務局ヨリ拝借品
キツテ　蝦夷ニテ用ヰルモノ　同
魚ヲ釣具　数品　同　同
伊太里亜国ウエニス夜景写真図　同
草根製ノタハシ　台湾人ノ用ヰルモノ　同
幣　蝦夷ニテ用ヰルモノ　同

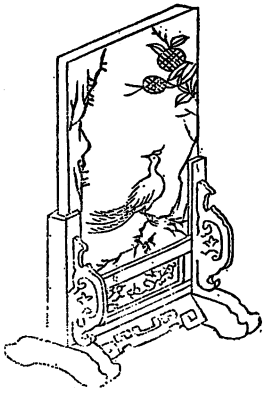
竹琴　同　同
巾着　蝦夷ニテ用ヰルモノ　博覧会事務局ヨリ拝借品
頭巾　同　同
伊太里亜ウエニス夜景写真図　同　同
朝鮮生上布　同
梭　同
朝鮮衣　同
脛巾　同
麻布見手本　同
樹筋製箒　台湾人ノ用ヰルモノ　同
喇叭　朝鮮製　同
米国ナイヤラカ（ガラ）瀑布油画　蜷川式胤
久松学校写真　同
万国地図　同
晴雨機　同
英国古代花器模　同
伊太利亜モサイク　同
陶器玉石　同
仏蘭西人印　同
ブラチヤノトバス　同
硝子ニ文字ヲ記スル筆仏蘭西製　同
英国服飾　同
正倉院写真　同
海面測量図　同

水汲　蝦夷ニテ用ヰルモノ　博覧会事務局ヨリ拝借品
ガンジキ　同　同
朝鮮古銭　数枚　同
マツチ入　同
獣ノ餌ヲ盛ル器　同
紙　同
朝鮮袴　同
古銭数種　薬師院実延
石版絵　数品　玄々堂
銅版図　同
籾仏　額田部村喜多甚平
金銀舎利塔　森岡庄治
小杓子　蝦夷ニテ用ヰルモノ　博覧会事務局ヨリ拝借品

奈良博覧会物品目録　第十四号

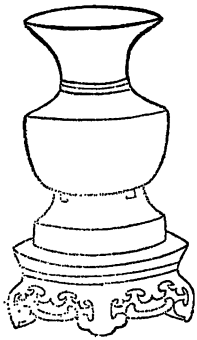
同十二号　蜷川式胤
佐土原班竹
ホルネヲ国矢　同
円形写真　同
キブス人写真　同
石象眼　同
ビルマルク石版　同
矢根　同

魯西亜帝額　同
印版機械　同
紙煙草製機械　同
白壇惣彫香箱　同
石版画集　玄々堂
玉硯屏　博覧会事務局ヨリ拝借品
昨明治七年支那和親ノ時支那帝ヨリ献所



朝鮮紬　博覧会事務局ヨリ拝借品
朝鮮刀子　同
墨　朝鮮製　同
麻布見本　同
弓　蝦夷ニテ用ヰルモノ　同
木ノ皮組物　同　同
アヘン煙管　同
勾玉　朝鮮製　同
鉄炮袋　台湾ニテ獲タルモノ　同
靴　同　同

刀　同　同
矢　二本　同　同
写真　同　同
玉薬入袋　同　同
鎗　台湾溪口ニテ獲タルモノ　同
熊手　台湾生番ニテ獲タルモノ　同
靴払　同　同
茶碗　朝鮮製　同
石笛　同　同
羅紗払　墺国製　同
朝鮮壺　同　同
筆　朝鮮製　同
袋物　支那帝ヨリ所献　同
古銅瓶　博覧会事務局ヨリ拝借品
支那帝ヨリ所献



蓋物　西京丹山焼　同
菓子器　淡路焼　東京橋本月松画　同
蛇味線　同
砂張行厨　朝鮮製　同

## 第十三号

製銅　吉野郡和田村産　明治元九月始テ此鉱山ヲ発堀ス　岡島長兵衛
貝石　数百品　坂田三郎平
稲　数十種　中村直三
衡　数十
活板器械　小山田一義
石炭　当国宇陀郡産　松尾四良三郎
岩坪　数箇　第三会議所
天降石　宇陀郡大津村
焼米　平群郡米尾山土中ヨリ堀出スモノ　森川喜七
ポンプ
銅鉱　当国天和山産
砿石　吉野郡川俣産明治六年十一月発堀ス
荒銅　当国吉野郡小坪山産　名迫行従
荒銅　同　明治元七月始テ発堀ス　岡島長兵衛
鉱石　備前産　近江産　美作産　大国有寿
伊勢産　豊後産　備中産
紀伊産　数十品
銀秤　和田弥市
了秤　同
六氏秤　同
三十氏秤　同
六十氏秤　同
金皿秤　同

是レ東西廻廊陳列不売品ノ概略ナリ其売品ノ若キハ是ヨリ以下三十号ニ至ル迄各国各地ノ古今ノ天産人造物参差トシテ充溢セリ然レモ朝ニ之ヲ出シタニ之ヲ鬻キ昨日ノ列品今日既ニ千里外ノ物トナリ其出入時ナケレハ復タ毛穎ノ能ク追及フ所ニ非ス故ニ今之ヲ略シテ記載セス末区ニ製糸場アリ毎日紅女数名出張シテ今現ニ糸ヲ采ル是レ当国平群郡法隆寺村林樸ナル者仏蘭西ノ製糸機械ヲ折衷シテ新タニ工夫セシモノニテ実ニ人ノ耳目ヲ新タニシ知識ヲ感動セシムルモノナリ是ノ他糸操車綿操車等数多ノ新発明ノ器械ハ追テ之ヲ博覧新報ニ誌シテ告示スヘシ乞看官察焉

---

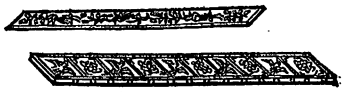
## 会場第三区大仏殿内正倉院宝庫御物陳列目録　第一号

### 第壱号

平城宮御宇天皇御祭服　二領
聖武天皇宸翰銅板　一枚

緋町方帯　一綴
錦御幕　一箱
錦御襪　一足
平絹御几帳　二
黄絹御薬袋　一
子日御几褥　一
紅染象牙尺　六本
緑染象牙尺　二本

緑染象牙尺　長九寸八分



紅染象牙尺　長九寸八分

象牙尺　二本
象牙札　三本

内一枚　表銘平城宮御宇太上天皇恒持心経　裏銘天平勝宝五年歳次癸巳三月廿九日

内一枚　表銘仁王会献盧舎那仏浅香一村　裏銘天平勝宝五年歳次癸巳三月廿九日

御箱　八箇

内一　革製黒漆金銀切金ヲ以鳳凰唐草ヲ描ク　蓋裏張紙銘会所献物　瑞碧念珠古錠　針差紙塞　金銅鈴等ヲ盛ル

内二　革製黒漆

内一　木製五色唐草模様

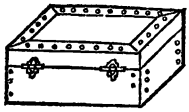
内一　唐木寄細工

内一　沈香寄木金具純金

内一　沈香製金泥ヲ以梅花ヲ画ク　高三寸五分　横七寸六分　竪九寸六分

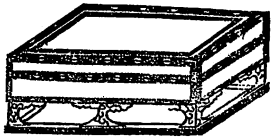
内一　紫檀製金具純金

紫檀筥



高三寸二分　横七寸四分　竪五寸四分

沈香製以金泥画梅花



高三寸五分　横七寸六分　竪九寸六分

御琵琶　海老尾ヲ失ス

古文書　一数函

内二　平城宮御宇天皇宸翰及弓削道鏡真跡等アリ其他枚挙ニ暇アラス

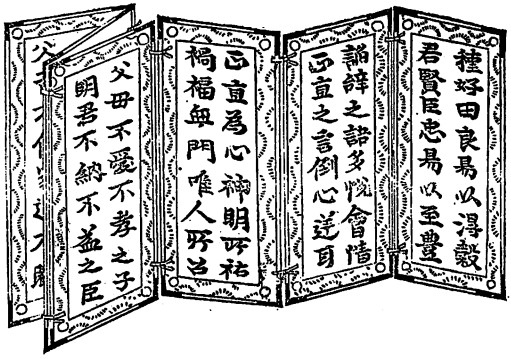
絵屏風　十五

鳥毛御屏風　（図、下段）　一雙

楽器　名不分　（図、次頁上段）　一

黒漆酒器　（図、次頁上段）　二

鳥毛御屏風　高サ四尺八寸




文綵アル鴨羽ヲ以文字ノ上ヲ筆勢ニ随テ張付縁ヲジヤバラノ如ク縫付タルナリ

東大寺墾田地図　七枚

内一　越中国新川大荆村墾田地云々　神護景雲元年十一月十八日

内二　越中国礪波郡伊加流伎野地云々　天平宝字三年十一月十四日

内一　越前国足羽郡糞置村地云々　天平宝字三年十二月三日

内一　磨滅不分明　天平宝字三年十一月廿四日

内一　越前国足羽郡糞置村地云々
天平神護二年十月廿一日
内一　磨滅不分明

楽器　名不分　長二尺五寸五分

黒漆酒器　長二尺五寸三分

銀壺　狩猟毛彫ノ模様アリ　二
裏銘東大寺銀壺重大五十五斤
甲蓋実並台総重大七十四斤十二両
天平神護三年二月四日

総高サ一尺六寸三分　口径一尺四寸二分

葛製箙　長二尺三寸七分　四

長一尺一寸八分

## 会場第三区大仏殿内正倉院宝庫御物陳列目録　第二号

東大寺図　天平勝宝八歳六月九日　一
純銀花菱台　裏銘重大三斤三両　二
鞆　十五
大理石鎮紙　八
御沓　革製　十足
御烏　五
内壺猩々緋金銀珠玉ヲ以テ装之
猩々緋御烏
縁白
頭扁面
形ノ彫玉
ニテ菱形
ノ紋ヲ銹
ルモノ
長一尺三寸

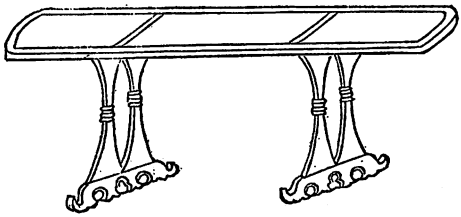
第二号

紫檀御琵琶　背螺鈿玳瑁花鳥模様　一
紫檀御玩咸　背螺鈿玳瑁鳥幷連珠様ノ物ヲ描ク　二
紫檀
御玩咸
螺鈿玳瑁
ヲ以テ花
鳥ヲ描ク
長三尺二分

素木七絃御琴　一
木製黒漆鉢　二
箱　油画唐草ヲ描ク　一
御脇息足　二
金銅皿　一
木製蓮花銹台　一
素木六絃御琴　一
金泥ヲ以テ花鳥獅子等ヲ描ク　献物帳曰檜木倭琴二張トアル是其一ナラン

御脇息　一
上古焼物壺　五
黒漆厨子　一
素木厨子　革製ノ袋ニ入　一
唐木碁局　碁子白キハ白玉黒キハ那知黒石家白銀功金ヲ以テ唐草ヲ描ク　一
白綾御褥　一
投壺矢　八
木製花菱台　一
水晶真珠　若干
御玩咸撥　二
内一　紅染牙
内一　緑染牙　何レモ花鳥ヲ描ク
素木新羅琴　但十二弦　一
天平尺　四
内一　木製大尺
内一　水牛製
内一　牙製
仮水晶皿　一
御脇息　一
五色唐草模様台　一
古製　シヤポン　十三
御褄　二

内一　大和錦
内一　緋錦
魚帯石帯損物　若干
象牙櫛　三
金剛智三蔵袈裟　黒漆革製金銀ヲ以テ鳳凰唐草ヲ描ケル匣ニ入ル　一領
銅製舎利塔　三
柄香炉　四
料理庖丁　十
貝匙子　十四
金匙　数本
蛟龍　但干物
黒瑪瑙製亀　一
金銅製鋏　一
古錠　一
御脇息　一
高壱尺
横三尺三寸



第三号
金銅製灯籠金具　二
象歯　一
象歯　高サ五寸九分
上代錫台　一
楚之駒　一
上代台　一
円形花皿　木製　四
方形花皿　木製　廿七
竹製花籠　裏銘東大寺花籠天平勝宝九年五月二日　百六十三
伎楽古面　百二十五
金銅幡金具　銘東大寺高笠万呂作天平勝宝四年四月九日　一
十六股鹿角　一

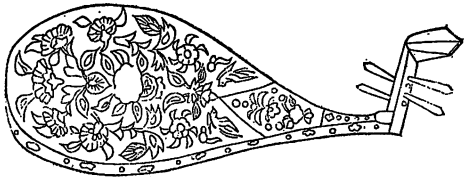
第四号
御寄懸　二領
内一　白綾
内一　大和錦
遠山御袈裟　一

# 会場第三区大仏殿内正倉院宝庫

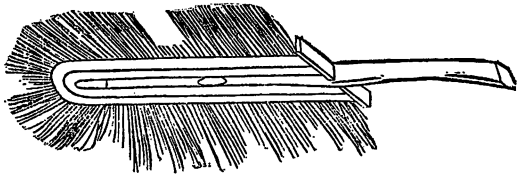
## 御物陳列目録　第三号

御衣　一
御褥　一
黒漆御冠桶　一
上古焼物壺　二
唐木雙六板　縁并足螺鈿象牙唐草模様塞二個添　一
古錠　一
玳瑁如意　四
内一　柄象牙小縁純金模様純金珠玉ヲ以テ装フ　二
御琵琶　一
内一　銘東大寺
内一　染象牙
塵尾

御琵琶
銘東大寺
螺鈿
玳瑁ヲ以テ装
長三尺二寸六分

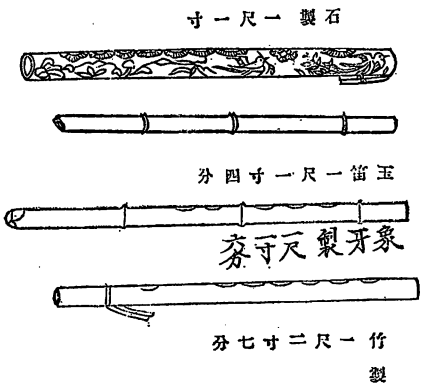


御塵尾
長二尺



犀角杯　一
象牙　長六尺許　一
古鏡　大小廿四
内五面八花形一面鉄円形
黒木御杖　二
緑青ノ画模様アリ分明ナラス
御笛　十二
内一　葡萄石
内二　象牙

内一　蠟石
内二　班竹小枝
内六　茸竹




御太刀　（図、次頁上段）　四
内一　白銀透彫唐草模様玉ヲ以テ飾ル柄白鮫鞘黒漆金蒔絵
内一　白銀唐草金象眼柄白鮫鞘黒漆白粉ノ唐草模様
内一　金銅毛彫柄白鮫鞘黒漆白粉ノ唐草模様
内一　金銅毛彫柄束沈香鞘黒漆金銀切金ヲ以テ鳥獣唐草ヲ描ク
素木印度製花形函　（図、次頁中段）　一

御太刀

總長二尺四寸六分

二尺八寸六分

二尺八寸

二尺五分

二尺七寸七分

紫檀御琵琶　二

内一　背螺鈿玳瑁ヲ以テ人物草花ヲ装フ

内一　五色染象牙花鳥模様

御袈裟　一領

御杖刀　身金象眼七曜星アリ　二

切金銀模様御琴　（図、中段）　一

切金銀ヲ以テ人物鳥獣草花ヲ装フ

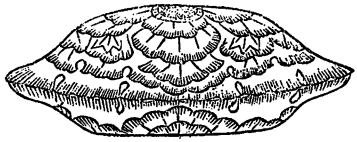
---

（素木印度製花形函）

金泥ヲ以テ装フ

横一尺八寸

竪六寸



切金銀模様御琴

裏銘云琴之在音盪滌邪心雖有正性其感亦深存雅却鄭浮侈是禁條暢和正楽而不淫

長三尺七寸七分

会場第三区大仏殿内正倉院宝庫

御物陳列目録　第四号

素木御弓　黒漆ヲ以テ人物ヲ描ク　絃竹ヲ以テ製ス

---

円形函　一

螺鈿玳瑁七宝ヲ以テ餝ル

内ニ瑞碧念珠数連水晶白玉青玉等ヲ盛ル

黄熟香

一名蘭奢待

重廿三貫五百目

末口壱尺四寸

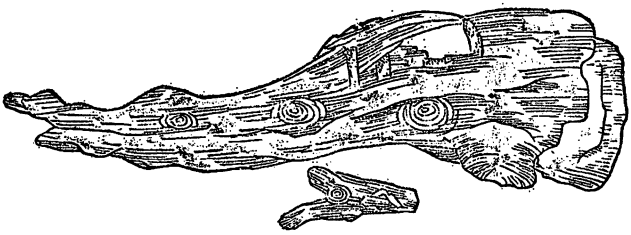
中周二尺七寸三分

長一尺　本口経三寸七分　末口一寸五分

同小切

長五尺一寸

本口周三尺九寸

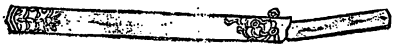


黄熟香

同小切

刀子

長八寸二分

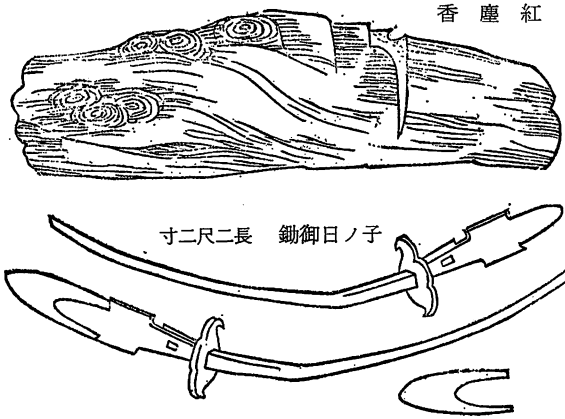


白玉酒器　一
御刀子　六本
玳瑁御杖　二

玳瑁御杖　長四尺四寸七分

紅塵香　一名大香沈　総長三尺四寸五分　一
子日鋤　銘子日献東大寺　天平宝字二年正月

紅塵香



子ノ日御鋤　長二尺二寸

仮水晶亀甲形椀　一
新羅墨　十五
内一　張紙銘曰開眼法皇用之天平宝物
内一　銘新羅楊家上墨
内一　銘革烟飛龍鳳凰極貞家墨
瑪瑙御硯　一
水晶玉　径一寸五分　一
竹帯御笙　内二昔竹　内二班竹　四
小刀子　十七
糞除衣御袈裟　一
玉箒　二
御玉箒　長二尺六寸六分

水晶大念珠　一
木製金漆念珠　一
鉄製三鈷　一
金銅柄香炉　一
柄紫檀鍍純金　珠玉ヲ以ス　台面玳瑁
寄木御巾懸　一
古鏡　三

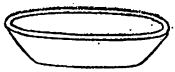
内一　背鈍銀切金ヲ以テ其上ニ人物鳥獣花鳥ヲ装フ
内一　白銅背花鳥ノ文下札銘円鏡一面重大六斤五両径一尺七分　花鳥背緋絶帯漆革箱緋綾親盛
内一　背七宝
円鏡　直径一尺三寸二分

背七宝

仮水晶皿　一

会場第三区大仏殿内正倉院宝庫
御物陳列目録　第五号

五色切金花鳥模様御箱　一
白玉御盃　竪二寸五分　横五寸一分　一
御鏡　背鈍銀其上ヲ切金ニテ図ノ如キ模様ヲ描ク



（図、次頁中段）

雲文竹御筆（図、中段）　十三
内一　銘文治元年八月廿八日開眼　法皇用之天平筆トアリ
蓮華台　二
金箔塗花裏五色ヲ以テ鳳凰天人唐草等ヲ描ク
沈香寄木亀甲形御箱　一
亀甲ノ縁背純金

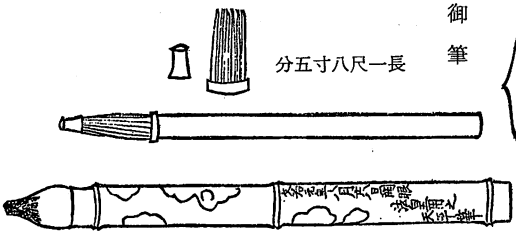
第五号

仮水晶巻物軸　十八
唐組御帯　一綴
唐木円形小台　一
紫檀碁局（図、下段）　一
染象牙螺鈿等ヲ以テ人物鳥獣花鳥ヲ描ク
碁子
紅紫染象牙花鳥ヲ描ク
函金銀切金花唐草ヲ作リ玳瑁ヲ以テ其上包ミ象牙ヲ以テ亀甲ヲ作ル
素木引物函　一
金泥ヲ以テ花鳥ヲ描ク
内ニ真珠ヲ盛ル
象牙笏　四
内一　銘延喜五年五月廿日　宮ノ一字アリ
古錠　一
白銅方鏡　一
獅子鳥唐草等ノ模様アリ
十二葉白銀製鏡　一
裏純金七宝模様

（御鏡）

径一尺三寸

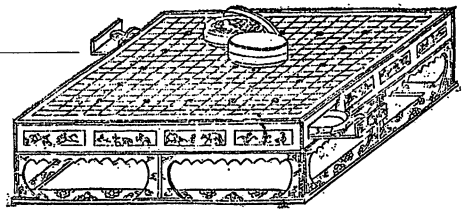
御筆



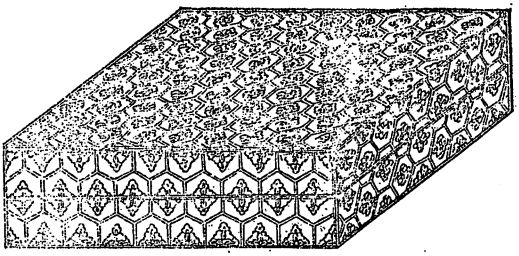
長一尺八寸五分

長二尺八寸六分

紫檀碁局　径一尺六寸四分



同　函　径一尺七寸四分



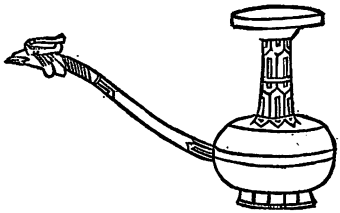
瑪瑙酒器　二
円形箱　二
内一　白銀切金花鳥ヲ描ク
内一　金銀製花簪ヲ入ル
魚帯　一綴
御太刀　六口
内一　金銅珠玉装柄唐木鞘黒漆
内一　白銀金象眼珠玉装柄白鮫鞘黒漆白粉唐草模様
内一　金物柄共損失

内一　鉄製共柄巻糸損失
内一　金銅製柄唐木
御弓　黒漆手取紫革　一
御褥　一
同　一
御几掛　一
同　一
唐木碁局　螺鈿染象牙以装フ
御寄懸　大和錦ヲ以テ作ル

第六号

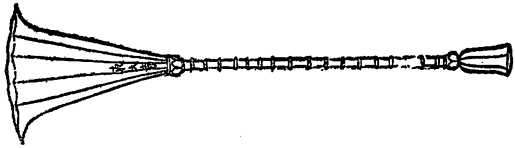
古銅金滅金水瓶

古銅金滅
金水瓶
高六寸四分



## 会場第三区大仏殿内正倉院宝庫
## 御物陳列目録　第六号

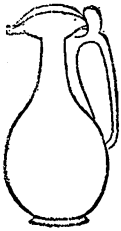
玳瑁如意　二
玳瑁麻姑手　二



玳瑁如意　長一尺七寸二分

仮水晶水瓶

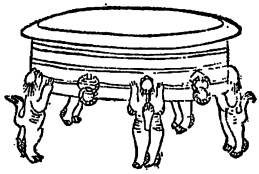
仮水晶
水瓶
高九寸一分



一

大理石御火鉢　足金銅五獅子　一

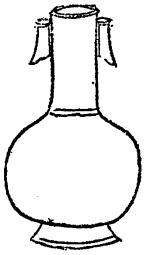
大理石
火鉢足
金銅五
獅子



世ニ瑪瑙ノ火鉢ト云モノ
高七寸三分

金銅投壺　唐草毛彫　一

金銅
投壺
高一尺
三分



犀角盃　二
投壺矢　三
金銅払子柄　一
金銅水瓶　一
上古柱掛　一
鉄製太刀　数口
上代手鉾　五
古鏡　十七

内三面七宝下札重大三斤五両径九寸二分
平螺鈿背緋絶帯漆革箱緋綾嚢盛
下札重大三斤二両径九寸一分
平螺鈿背絶帯革箱緋綾嚢盛
内三面八花形背唐草鳥獣ヲ彫ル内十一円形

沙張皿　五
鉾　三本
刀子　内三ツ合一四ツ合一七ツ合一　三十一本
印度製陶器　九
木製黒漆水瓶　切金銀唐草模様　一

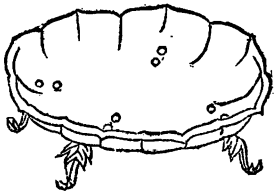
木製黒漆水瓶　高一尺三寸二分

第七号

吹玉　数斗
曲玉　三升余
印度製銅仏　三体
金銅板仏　十体
瓔珞金具　一匣
素木合子　内勾玉数十ヲ入　一
投壺矢　四本
純銀鉢　二
内一　銘重大三斤八両
一　銘重大三斤四両
金銅風鐸　八
金銅枚幡鎮鐸　十一
内十　銘枚幡鎮鐸天平勝宝九年五月二日

純銀鍋　銀鍋　高八寸　差渡一尺六寸

純銀鉢　銘重大三斤八両　差渡一尺三寸六分



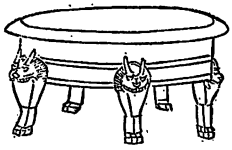
鉄輪　一
瓔珞金具　二匣
黒漆木鉢　三
御絵屏風　六枚
金銅板仏　三十七体
天蓋金物　一
純銀鉢　五
但一　添
内一　重大四斤七両
内一　重大五斤四両
内一　重大五斤一両
内一　重大五斤六両
台内三　銘重大一斤八両
内一　重大一斤七両

唐銅仏餉器　内一　蓋ナシ　四
火舎　足損失　一
砂張皿　二百二十四
砂張匙子　七十七本
唐草透釣香炉　内一純銀一赤銅　二

会場第三区大仏殿内正倉院宝庫
御物陳列目録　第七号

五色絵台
縁切銀ヲ以装古代ノ物ニテ何ノ台ナルカ不詳　一枚
八花形鏡　一
葛小筥　金泥花蝶模様　三
錫製壺　二
舎利塔　内一　金銅　二
金銅八稜皿　三
金銅花形皿　一
三鈷　台金泥白粉ヲ以テ唐草ヲ描ク　一
黒漆革製蓋　二
金銅火鉢

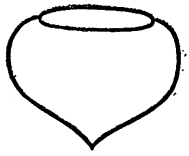
金銅御火鉢　高五寸二分　差渡一尺四寸五分



唐銅水瓶　一

糸幡　若干
印度窯陶器　数品

印度窯陶器



高一尺三寸　口径九寸

木製皿　七枚
毛氈　二十五
砂張鉢　二百七十二
五色唐帋　十九巻
釣筵　九枚
木製黒漆皷胴　二十
皷銅輪　十一
薬種　数品
鏡蓋　二
錫杖　三
幡金具　若干

第八号

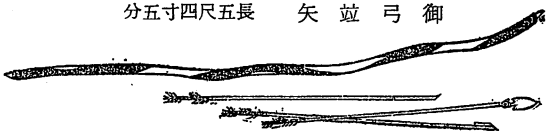
御馬具　十輛
御矢　二函
木製弓（図、中段上）　廿五張

鉾

第九号

御絵屏風
古切御屏風
黒漆払子柄

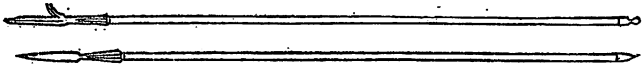
御弓並矢



長五尺四寸五分

石ツキ三寸五分或四寸

長二尺二寸一分



柄長一丈三寸五分或一丈五寸

鉾身長一尺二寸或九寸

三十三本

四枚
二雙
一

此レ大仏殿内御物陳列ノ概略ナリ尚多少ノ品類アレトモ古代ノ物ニ係ルヲ以テ其器何ニ用キタルカ又其称呼何タルカ更ニ不詳サレハ妄リニ臆見ヲ以テ之レカ説ヲ為サス暫ク疑ヲ缺キテ此ニ記載セス且其他水谷川従五位所蔵ノ宸翰及ヒ春日神社ノ鼉太皷石上神社ノ上古土製ノ酒壺及ヒ光明皇后御真蹟ノ仏足石法隆寺所蔵ノ聖徳太子絵伝ノ屏風等アレトモ此編ハ専ラ正倉院宝庫御物ノミヲ記載スルノ本旨ナルヲ以テ今之ヲ略シテ贅セスト云ノミ